

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第36集

元島遺跡Ⅲ

磐 田 市

平成24年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

2013

静岡県埋蔵文化財センター

序

元島遺跡の発掘調査は、太田川の河川改修事業に伴って、平成6年度以降3次にわたりて行つきました。平成6年度～平成9年度の1次調査では、中世の船着場と思われる遺構とそれに隣接して整然と配置された倉庫と思われる掘立柱建物群を検出し、この地が中世の水運と物流の拠点になっていたことを明らかにしました。また、古墳時代の舟形粘土棺という非常に珍しい遺構も発見しました。

平成12年度～平成13年度に行つた2次調査では、弥生時代の方形周溝墓群を発見し、この地が墓域として利用されていたことを明らかにしました。

今回の3次調査は、2次調査を行つた地区に隣接する場所で、古墳と弥生時代中期の方形周溝墓を発見しました。

古墳は後世の洪水の影響を受けたと思われ、主体部の残りは良くありませんでしたが、それでも大刀が出土しました。検出した古墳は1基だけでしたが、弥生時代の方形周溝墓で、古墳時代前期の遺物がまとまって出土したものがあることから、方形周溝墓を後の時代に古墳として利用したことがうかがえました。

方形周溝墓は2次調査と合わせると40基に及びました。標高0m前後という低地は人間の居住地には適していなかったと思われますが、周囲に古墳や墳墓を作るような山地のない土地では、このように居住に適さない低地が墓域に選ばれたものと思われます。

太田川の河川改修事業に伴う元島遺跡の調査は、この報告をもって終了となります。本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、袋井土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田順也

例 言

- 1 本書は静岡県磐田市豊浜にある元島遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は、二級河川太田川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、平成 22 年度は静岡県教育委員会文化財保護課指導のもと財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行い、平成 23 年度、24 年度は静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本調査は平成 22 年 8 月～平成 23 年 3 月、平成 23 年 6 月～平成 24 年 3 月、資料整理は平成 23 年 12 月～平成 24 年 3 月、平成 24 年 8 月～平成 25 年 3 月に行つた。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

平成 22 年度
所長兼常務理事 石田彰 次長兼総務課長 松村亨 専門監兼事業係長 稲葉保幸
総務係長 潑みやこ
調査課長 中鉢賢治 調査第一係長 勝又直人 調査第二係長 岩本貴 調査第三係長 溝口彰啓
調査第四係長 富樫孝志 調査担当 調査研究員 大石裕治
平成 23 年度
所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利真 主幹兼事業係長 村松弘文 総務係長 潟みやこ
調査課長 中鉢賢治 主幹兼調査第一係長 富樫孝志 調査第二係長 溝口彰啓
調査担当 指導主事 大石裕治
平成 24 年度
所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利真 主幹兼事業係長 前田雅人 総務係長 潟みやこ
調査課長 中鉢賢治 主幹兼調査第一係長、調査担当 富樫孝志
- 5 本書は、特記のない限り富樫が執筆した。
- 6 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 木製品の樹種同定については、東北大学教授、鈴木三男氏に原稿をいただいた。

以下の業務については外部委託によって実施した。
現地掘削業務 壬生産業株式会社
現地測量業務 株式会社フジヤマ
整理作業・保存処理業務 株式会社パソナ
- 8 鳴生土器の時期区分については、静岡大学准教授、織原和氏に御教示をいただいた。
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を示す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系(世界測地系)である。
- 2 第 1 図は磐田市の都市計画図を複写し、加筆した。
第 2 図は国土地理院発行 1/25,000 地形図「磐田」を複写し加工・加筆した。

目 次

序・例言

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と過去の調査	1
第2節 発掘調査の経過	2

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	7
第2節 基本層序	7

第3節 発見された遺構と遺物	10
----------------------	----

第4章 自然科学分析	52
------------------	----

第5章 まとめ	54
---------------	----

図版目次

第 1 図 元島遺跡調査区設定図	3	第 20 図 1 号土器棺実測図 2	31
第 2 図 元島遺跡と周辺遺跡	6	第 21 図 2 号土器棺平・断面図、 2 号土器棺実測図 1	32
第 3 図 遺構分布図とグリッド設定図	8	第 22 図 2 号土器棺実測図 2	33
第 4 図 基本土層図	9	第 23 図 土坑 1 平・断面図	34
第 5 図 4 号墳平・断面図	11	第 24 図 土坑 1 出土遺物	35
第 6 図 4 号墳主体部平・断面図	13	第 25 図 包含層出土遺物 1	37
第 7 図 4 号墳、31 号墓、32 号墓出土遺物	14	第 26 図 包含層出土遺物 2	39
第 8 図 30 号墓平・断面図	16	第 27 図 包含層出土遺物 3	40
第 9 図 31 号墓平・断面図	17	第 28 図 包含層出土遺物 4	42
第 10 図 32 号墓平・断面図	19	第 29 図 包含層出土遺物 5	45
第 11 図 33 号墓、34 号墓平面図	20	第 30 国 包含層出土遺物 6	47
第 12 国 33 号墓、34 号墓断面図	21	第 31 国 包含層出土遺物 7	49
第 13 国 34 号墓、36 号墓出土遺物	22	第 32 国 包含層出土遺物 8	50
第 14 国 35 号墓、36 号墓平・断面図	24	第 33 国 包含層出土遺物 9	51
第 15 国 37 号墓平・断面図	26	第 34 国 2 次調査、3 次調査検出の 方形周溝墓	55
第 16 国 38 号墓、41 号墓平・断面図	27		
第 17 国 39 号墓、40 号墓平・断面図	28		
第 18 国 1 号土器棺平・断面図	29		
第 19 国 1 号土器棺実測図 1	30		

表目次

第 1 表 出土遺物観察表	56
---------------------	----

写真図版目次

図版 1	元島遺跡遠景（北から）	図版 15	1号土器棺蓋出土状況
	元島遺跡遠景（南から）		1号土器棺身出土状況
図版 2	16区全景	図版 16	土器棺2出土状況1
図版 3	17区全景		土器棺2出土状況2
図版 4	4号墳出土遺物	図版 17	土器棺1完掘状況
図版 5	34号墓出土遺物		土器棺2完掘状況
図版 6	36号墓出土遺物	図版 18	土坑1遺物出土状況
図版 7	土坑1出土遺物		土坑1完掘状況
図版 8	4号墳全景	図版 19	包含層遺物出土状況1
	4号墳主体部遺物出土状況		包含層遺物出土状況2
図版 9	4号墳墳丘断面1	図版 20	包含層物出土状況3
	4号墳墳丘断面2		包含層物出土状況4
図版 10	30号墓	図版 21	1号土器棺立面写真
	31号墓	図版 22	2号土器棺立面写真
図版 11	32号墓	図版 23	包含層出土遺物集合写真1
	33号墓	図版 24	包含層出土遺物集合写真2
図版 12	34号墓	図版 25	包含層出土遺物集合写真3
	36号墓	図版 26	4号墳出土遺物
図版 13	37号墓	図版 27	34号墓、36号墓出土遺物
	38号墓	図版 28	土器棺、包含層出土遺物1
図版 14	39号墓、40号墓	図版 29	包含層出土遺物2
	41号墓	図版 30	包含層出土遺物3
		図版 31	4号墳、土坑1出土木製品

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と過去の調査

静岡県袋井土木事務所は、太田川・原野谷川の下流を拡幅し、増水時の洪水対策を行うにあたって、静岡県教育委員会文化課（現文化財保護課、以下、文化課とする）に工事対象地域内での遺跡の有無を照会した。文化課は福田町（現磐田市）教育委員会と協議し、照会のあった工事対象地域内で元島遺跡があることを回答した。その後、袋井土木事務所と文化課、福田町教育委員会で元島遺跡の取り扱いを協議し、文化課と福田町教育委員会は、元島遺跡は中世～近世初頭の集落が良好な状態で残っている可能性が高く、文献にも現れる集落と考えられることから、現状保存が望ましいとの意見を出し、元島遺跡を現状保存した河川の拡幅方法を検討したが、流域住民の集団移転以外に元島遺跡を残した河川改良是不可能であることから、元島遺跡の記録保存もやむを得ないとの結論に達した。

平成6年1月、福田町教育委員会が確認調査を行い、調査対象範囲が23,000 m²であることを確認した。

確認調査の結果を受けて静岡県教育委員会が本調査を行うこととし、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に調査を委託した。

以下、これまでに行った発掘調査の概要を記す。

1次調査

調査年度：平成6～9年度

調査地区：1区～10区（55,590 m²、第1回）

調査概要：近世、中世、古墳時代、弥生時代で8面に渡る調査面を確認した。弥生時代の調査面では方形周溝墓を9基検出した。古墳時代前期の調査面では、掘立柱建物跡と方形区画溝を検出し、古墳時代中期の調査面では、墳墓を3基検出し、そのうち1基の主体部から舟形粘土棺が出土した。副葬品は残っていないかったが、粘土で包まれた木棺とその中にベンガラが残っていた。また、乳歛が出土したことから、子供用の木棺であったことも判明した。

中世では15世紀と13世紀前半、後半の調査面が残っており、13世紀後半と15世紀の調査面では、クリーク状の溝に囲まれた微高地に、主軸をそろえて整然と配置された掘立柱建物跡を検出した。クリーク状の溝は遺跡に隣接して流れていた旧原野谷川からの舟の進入路として掘られたと思われ、船着場と思われる引き込み線状の溝も見られた。これらの状況から、元島遺跡が海運の拠点で物資の集積場所になっていたことが判明した。そして、明応地震（1498年）による津波で大きな被害を受け、集落は速に縮小していくという集落の変遷が復元された。

文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第109集『元島遺跡I（遺構編 本文）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998年

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第109集『元島遺跡I（遺構編 図版）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998年

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第110集『元島遺跡I（遺構編 附図）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998年

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第116集『元島遺跡I（遺物・考察編1－中世－）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999年

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第116集『元島遺跡I（遺物・考察編2－古墳時代－）』財団法人

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999年

2次調査

調査年度：平成 12～13 年度

調査地区：11 区～15 区（9,240 m²、第 1 図）

調査概要：弥生時代中期～後期の方形周溝墓 29 基と土器棺墓が発見された。方形周溝墓は、溝の四隅が切れるものが多く、一辺 10 m 程度のものが主体であった。墳頂部が削平されているものが多く、主体部が残っていたのは 2 基だけであった。

古墳時代の調査面では、円墳 3 基と掘立柱建物跡 8 棟、竪穴状造構 5 基などが発見された。円墳はいずれも弥生時代の方形周溝墓の墳丘を利用して作られていたが、方形周溝墓の構築とは 300 年ほどの時期差があるため、方形周溝墓との関連は薄いと考えられた。掘立柱建物跡は 1 間 × 2 間のものが主体で、規模を拡大する場合、梁間を 1 間のままで桁行の柱間を増やすという弥生時代以来の技術が見られた。竪穴状造構は、性格は明らかにできなかったが、方形と隅丸方形のものがあり、壺、甕、高杯、鉢がまとめて出土した。土器の器種は一般的な組成で、特殊な性格をうかがわせるものではなかった。

中世の調査面では掘立柱建物跡や土坑、井戸跡などを検出した。掘立柱建物跡は主軸をそろえて隣接しているものがあり、これらは同時期に存在していたと考えられた。

文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第 160 集『元島遺跡 II (遺構・考察編)』財団法人静岡県埋蔵文化財

調査研究所 2005 年

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第 160 集『元島遺跡 II (遺物編)』財団法人静岡県埋蔵文化財調査
研究所 2005 年

第 2 節 発掘調査の経過

平成 22 年度

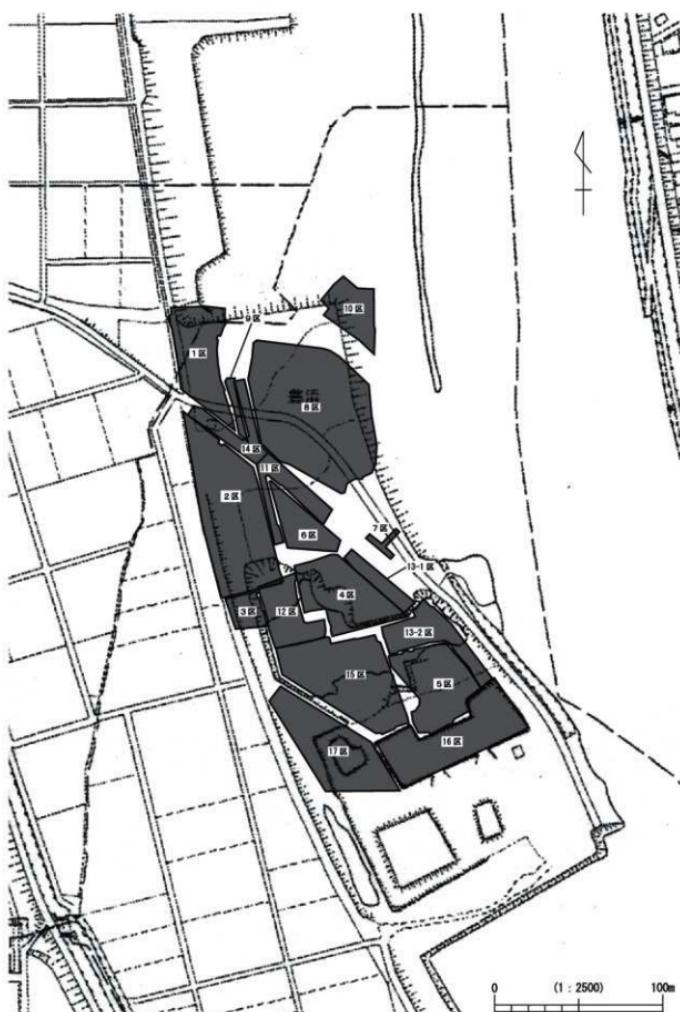
第 1 図の 16 区を調査した。8 月 3 日に袋井土木事務所と契約を締結し、準備工を経て 8 月 24 日から現地調査に着手した。調査範囲の決定に当たって、調査範囲の北側は、1 次調査の 5 区と 2 次調査の 15 区に隣接する部分のため、測量によって、1 次調査 5 区と 2 次調査 15 区の南限を割り出し、これを調査範囲の北限とした。一方、調査範囲の南側は、遺跡の広がりを確認しなければ決定できなかつたため、本調査に先立つて、南側への遺跡の広がりを確認するための調査を行つた。そして、方形周溝墓が途切れる部分を調査範囲の南限とした。

8 月 31 日から表土除去を始め、調査区の形が歪なことと、遺物包含層上面の高低差があること、涌水により地層の確認が困難なことから、表土除去に時間を要したが、10 月 1 日から遺物包含層を掘削し始めた。多量の涌水により地層の確認が難しい上に、遺構検出面の高低差が大きいため、包含層掘削も難航したが、方形周溝墓と土器棺、古墳を検出した。古墳の主体部は残りが悪かったが、大刀が出土した。

平成 23 年度

第 1 図の 17 区を調査した。準備工を経て 7 月 28 日から表土除去を始めた。8 月 16 日には表土除去を終わり、遺物包含層の掘削に入った。16 区の調査と同様、涌水により地層の確認が難しい上に、遺構検出面の高低差があるため、遺物包含層掘削に時間を要した。さらに 9 月には停電による水中ポンプの停止や台風による大雨で調査区が水没し、復旧に予想外の時間を要したが、10 月 12 日からは遺構検出に入った。16 区に比べて涌水が多い上に、遺構の残りが良くなかったため、遺構検出は困難であつたが、方形周溝墓と土器棺墓を検出した。

第2図 采掘調査の経路



第1図 元島道路調査区設定図

日誌抄	
平成 22 年度	
8月 3日	業務委託の契約締結
8月 12日	現場設営及び精度管理業務の準備
8月 13日	調査着手前確認・協議
8月 18日	現場設営等の打ち合わせ
8月 24日	調査対象地整地工事開始
8月 30日	調査区範囲確認
8月 31日	表土除去作業開始
9月 6日	発電機・水中ポンプ搬入、設置
9月 14日	調査区仮囲い工事 電気配線工事
9月 15日	調査区土留め工事（16 日まで）
9月 16日	現場設営作業
9月 24日	ベルトコンベア搬入（20 台）
9月 27日	表土除去作業終了
10月 1日	包含層掘削作業開始
10月 7日	グリッド杭の打設（調査区東部）
11月 5日	方形周溝墓、古墳などを発見
11月 22日	発電機防護柵工事実施
12月 8日	34 号墓写真撮影、遺物取り上げ
12月 9日	1 号土器棺を発見
12月 20日	遺構検出・遺構掘削作業開始
12月 27日	排土整形業務
1月 12日	包含層掘削作業終了
1月 19日	土器棺墓を発見
1月 24日	遺構掘削作業
1月 25日	排土整形業務
1月 31日	空中写真測量・景観写真撮影準備
2月 3日	各遺構の写真撮影実施
2月 4日	空中写真測量・景観写真撮影実施
2月 7日	遺構実測作業・写真撮影作業
2月 17日	現地撤収作業準備
2月 21日	排土整形業務
2月 22日	現地撤収作業開始
3月 10日	現地事務所（調査員棟）撤去
3月 14日	現地事務所（調査員棟）明け渡し
3月 15日	契約満了 業務完了届提出
平成 23 年度	
7月 25日	現地作業開始
7月 28日	表土等除去作業着手
7月 29日	締切排水工実施
8月 8日	掘削防護柵工着手
8月 16日	表土等除去作業完了
8月 17日	作業員による掘削作業着手
8月 18日	包含層掘削作業着手
9月 1日	台風により現場作業中止
9月 6日	基礎整理作業実施
9月 14日	発電機 1 台異常
9月 15日	水中ポンプ停止、調査面水没
9月 20日	台風接近の為、現場作業中止
9月 21日	台風により、調査区全体水没被害
10月 3日	台風復旧作業完了
10月 11日	包含層掘削作業完了
10月 12日	遺構検出作業実施
10月 14日	遺構掘削作業実施
10月 18日	地元小学校 6 年生遺跡見学
10月 23日	現地説明会実施
10月 31日	応急的保存処理作業
11月 1日	高所作業車による写真撮影実施
11月 4日	空中写真測量作業
11月 7日	調査区基本土層作成作業実施
11月 8日	撤去開始 資材等搬出作業
11月 9日	掘削防護柵工（撤去工）着手
11月 10日	掘削防護柵工（撤去工）完了
11月 11日	古津波堆植物観察会実施
11月 14日	撤去工 作業員棟、仮設トイレ等 撤去・搬出
11月 25日	基礎整理作業
12月 12日	資料整理作業着手
1月 5日	整理作業 分類・仕分け作業着手
1月 30日	整理作業 接合作業着手
2月 23日	整理作業 完了（接合作業まで）

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

元島遺跡のある旧福田町（現磐田市）は太田川、傍僧川、今ノ浦川の氾濫源にあり、海拔2mほどの平野が広がっている。太田川の河口には天然の良港福田港がある。遠州灘の港としては、かつて掛塚港と横須賀港があったが、宝永4年（1707年）の大地震による土地の隆起で横須賀港が使えなくなつて以降、福田港が海運の拠点として繁栄するようになった。明治時代になり東海道本線が開通した後は物資輸送の手段が海運から陸運に移ったため、福田港は海運の拠点から漁港へと役割を変えて、シラス漁の拠点として現在もぎわっている。

元島遺跡のある磐田市豊浜は、太田川と原野谷川の合流地点から1km南の西岸にあり、海岸線までは2km程である。このあたりでは、繩文海進後、海岸線に平行して砂堤列が形成され、現在のところ3列が確認されている。そして、砂堤列の周辺には潟湖や後背湿地が発達し、河川が運んできた土砂がそれらを埋めた沖積平野が広がっている。第2図に示すように、平野部では河川が至る所で蛇行し、自然堤防や湿地帯を発達させている。そのため、遺跡周辺にはシルト層や粘土層、泥炭層、砂層、礫層が堆積している。平成23年3月11日に起こった「平成23年東北地方太平洋沖地震」以降、東海地震が想定される静岡県では津波対策が急務とされ、専門家による津波痕跡の調査が始まった。元島遺跡や周辺で行われている河川改修工事現場では専門家による調査で、津波の痕跡が確認され、今後の発掘調査では、津波痕跡調査への協力も必要となった。

第2節 歴史的環境

現在、元島遺跡の周辺で確認されている遺跡は少ない（第2図）。太田川をはさんで東側にある塙口遺跡では、古墳時代の土師器が出土したとされているが、本格的な調査が行われていないため、遺跡の内容は不明である。元島遺跡の北には堂山遺跡、東貝塚、野際遺跡、鎌田・鍛影遺跡、東浦遺跡といった遺跡があるが、いずれも磐田原台地の南端にある微高地の上にある遺跡で、元島遺跡とは立地が異なる。

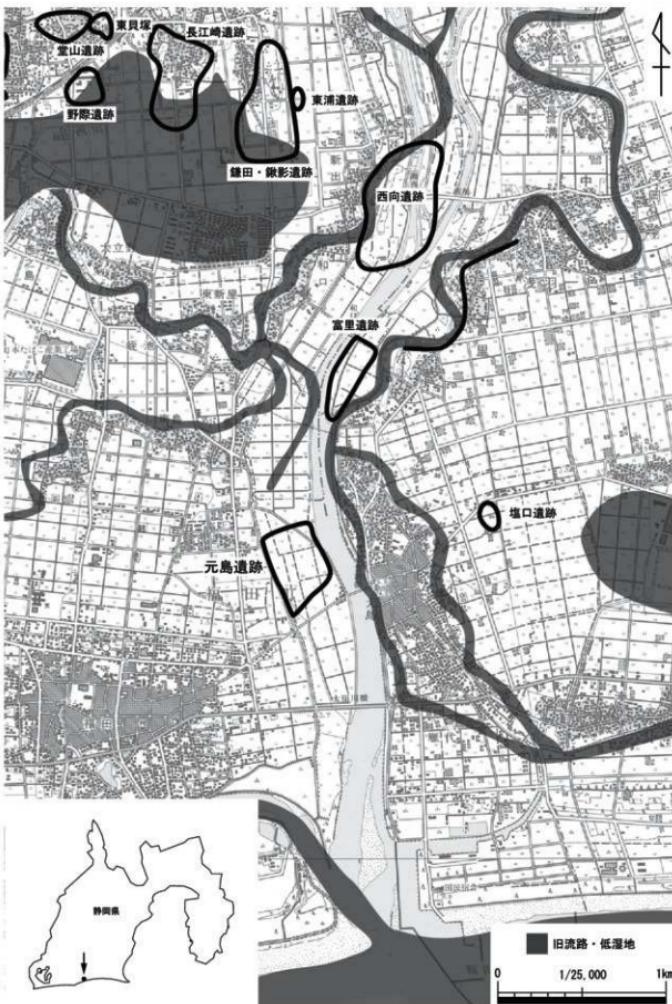
元島遺跡のこれまでの調査で、海拔0mもしくはそれ以下という低地で方形周溝墓や古墳が発見されている点で関連を考えられるのが、太田川沿いで発見された西向遺跡と富里遺跡（第2図）である。

西向遺跡は、太田川の河川改修工事に伴って財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成21年度に確認調査、平成22年度に本調査、平成23年度に資料整理を行った遺跡で、標高1mほどの低地で中世～古代の掘立柱建物跡や土坑、溝を検出し、静岡県西部の湖西市、愛知県渥美半島産の山茶碗が出土した。その下には古墳時代の遺構面があり、掘立柱建物跡を検出すると共に埴輪が出土したことを特記できる。

富里遺跡は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った平成21年度の試掘調査で発見された遺跡で、中世の遺物包含層と遺構面が2面確認されている。そして、この報告書を作成している平成24年度、静岡県埋蔵文化財センターが本調査を行っており、その成果が期待される。

西向遺跡と富里遺跡はいずれも太田川流域の微高地、もしくは砂堤列上にあると思われる遺跡で、標高1m程度、もしくはそれ以下という低地にある点で、元島遺跡とよく似た立地である。標高が海面下になるような遺跡の存在は、従来の認識を覆すことで、弥生時代以降の低地利用に再検討を迫るものである。さらに発掘調査ではないが、平成12年度の太田川河川改修工事中、埋蔵文化財包蔵地に登録されていない場所で奈良時代の須恵器が出土した例があることから、太田川流域の低地には、未知の遺跡が埋まっていることは大いに考えられる。

第2図 道路の概要



第2図 元島遺跡と周辺道路

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

1 現地調査

調査にあたって平面直角座標第Ⅷ系に基づき、10m幅のグリッドを設定した。グリッド記号は、X = -145.500、Y = -55.610を原点として、X軸を0ライン、Y軸をAラインとし、それぞれ南方向と東方向に展開させ、X軸に算用数字、Y軸にアルファベットを与えた（第3図）。

表土除去はバックホーで行い、遺物包含層直上まで掘り下げた。その後、遺物包含層を掘り下げたが、その下の遺構検出面に高低差がある上に、涌水により地層の確認が難しかったため、包含層掘削は困難であった。包含層掘削後は、遺構検出を行ったが、これも涌水により困難を極めた。

測量は、トータルステーションとレベルを使い、1/100の全体図と1/20の遺構個別図を作製した。

写真撮影は、中判の白黒フィルムとリバーサルフィルム、35mmリバーサルフィルムを併用した。調査区全体の写真撮影には高所作業車を使った。工程の記録とメモ写真等にはデジタルカメラを使用した。

また、現地調査と並行して基礎整理作業を行い、現地で遺物の洗浄と注記を行った。

2 資料整理

資料整理は、静岡県埋蔵文化財センターで行った。出土品の分類、仕分けを行った後、土器の接合と復元を行った。そして、実測の後、トレースを行った。出土品の写真撮影は、埋蔵文化財センターの写真室で行い、大判のリバーサルフィルムとモノクロフィルムを使って撮影した。

第2節 基本層序

基本土層図を第4図に示す

1層～4層：中世以降の水田面と思われる。

5層：第4図AとCで見られた粘土層で、湿地状の環境で堆積したと思われる。

6層：第4図Bで見られた砂質土で、湿地状もしくは緩やかに水が流れる環境で堆積したと思われる。

7層：微細な未分解の有機質を含んでいると思われる粘土層で、湿地状の環境で堆積したと思われる。

8層：第4図Bで見られた粘土層で、植物遺体を含んでいる。

9層：第4図Aで見られた粘土層で、植物遺体を含んでいる。

10層：植物遺体を大量に含んだ粘土層である。

11層～13層：第4図Bで見られた粘土層で、植物遺体を含んでいる。

14層：植物遺体を大量に含んだ粘土層で、目立つ。古墳時代～弥生時代の遺物を含んでいる。

15層：第4図AとCで見られた粘土層で、植物遺体をわずかに含んでいる。

16層：第4図Cで見られた粘土層で、植物遺体と古墳時代～弥生時代の遺物を含んでいる。

7層～16層は未分解の植物遺体を含んでおり、湿地状の環境で堆積したと思われる。

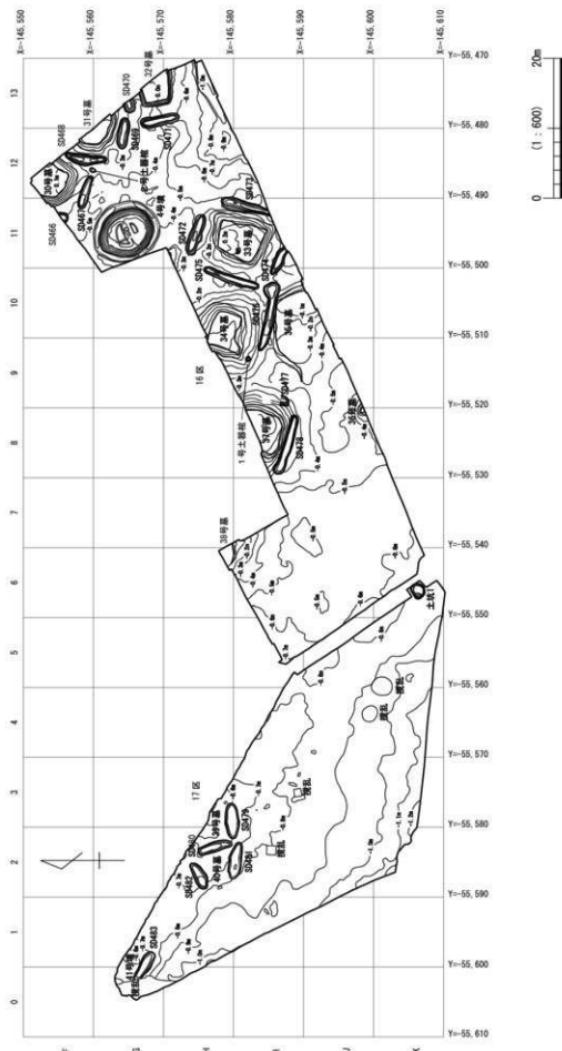
17層：第4図AとBで見られた粘土層で、砂を含んでいることから、緩やかに水が流れる環境で堆積したと思われる。古墳時代～弥生時代の遺物を含んでいる。

18層：第4図Bで見られた砂質土で、粗い砂や粘土のブロックを含んでいることから、水が流れる環境で堆積したと思われる。古墳時代～弥生時代の遺物を含んでいる。

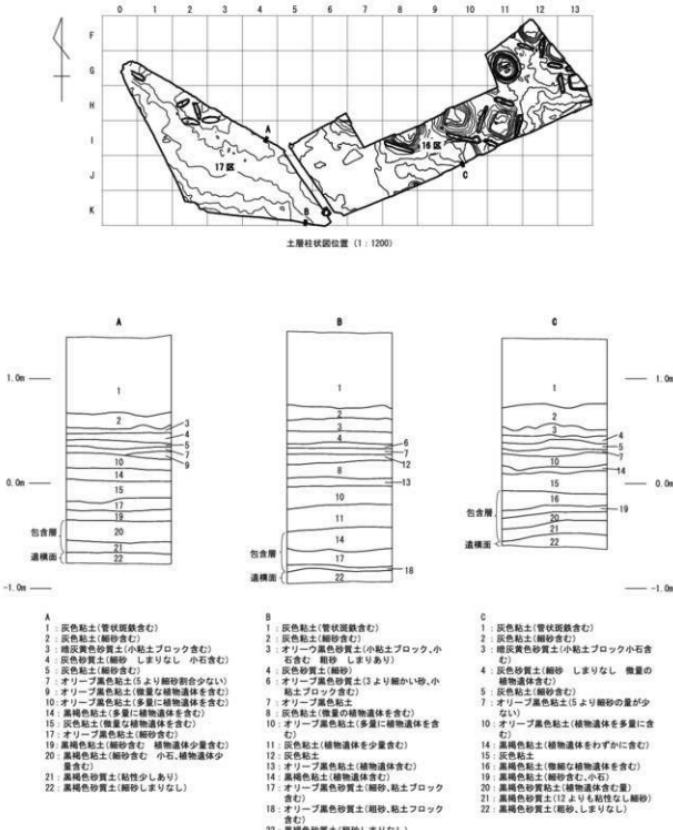
19層、20層：第4図AとCで見られた粘土層で植物遺体と古墳時代～弥生時代の遺物を含んでいる。

21層、22層：粗い砂を含んだ砂質土で、水が流れる環境で堆積したと思われる。古墳時代～弥生時代の遺物を含んでいる。また、22層の上面で弥生時代の方形周溝墓と古墳を検出した。

第3章 調音の吸収



第3図 遺構分布図とグリッド設定図



第4回 算木本腰回

第3節 発見された遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代～古墳時代の遺構、遺物を発見した。一部、縄文土器と思われる土器片や古代以降の土器も見られるが、いずれも遺物包含層から出土したもので、当該期の遺構はない。1次調査では中世～近世の良好な集落を調査したが、今回の調査では中世～近世の土器すら極めて少なかった。標高が低い湿地状の環境だったため、居住には適さなかつたと思われる。あるいは、1次調査や近年の地質学者による近隣での地質調査では、複数回に渡る津波の痕跡が確認されているため、古代以降の集落があったとしてもすべて流出したことと考えられる。その時、古墳時代以前の遺構はすでに埋没していたため、津波の被害を免れたのかかもしれない。

1 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、円墳を1基検出した。標高1mに満たない低地に古墳があることは信じ難いことだが、1次調査で3基の古墳を検出していることと、後述するように、2次調査に続けて弥生時代の方形周溝墓が密集して発見されていることから、近隣に山のない所では、居住に適さない低地が墓域として使われたのではないだろうか。

4号墳

1次調査で1号墳～3号墳を検出していたため、今回検出した古墳を4号墳とした（第5図）。

検出過程は次の通りである。遺物包含層を掘削している途中で遺構検出面の黒褐色砂質土（第4図の14層）と思われる土が出てきたため、その上面を追いながら掘削を続けたところ、この黒褐色粘土がマウンド状に盛り上がっている状況を確認できることから、遺構検出面ではなく、方形周溝墓の方台部が出ていている可能性を考え、全体の形状把握と共に周溝の検出に努めたところ、下記の所見を得た。

- ・方台部と思われる高まりの頂部付近で須恵器の罐が出土した。
- ・方台部と思われていた高まりが円形になる。
- ・周溝が方形にならずに高まりの周囲を円形にめぐっている。
- ・墳丘頂部で遺構の検出を試みたところ、褐色砂質土や灰色粘土が広がっているのを確認し、主体部の可能性が考えられた。
- ・墳頂にトレンチを入れたところ、大刀と思われる鉄製品が埋まっているのを確認した。

以上の点から、方形周溝墓ではなく、古墳の可能性が高いと判断した。

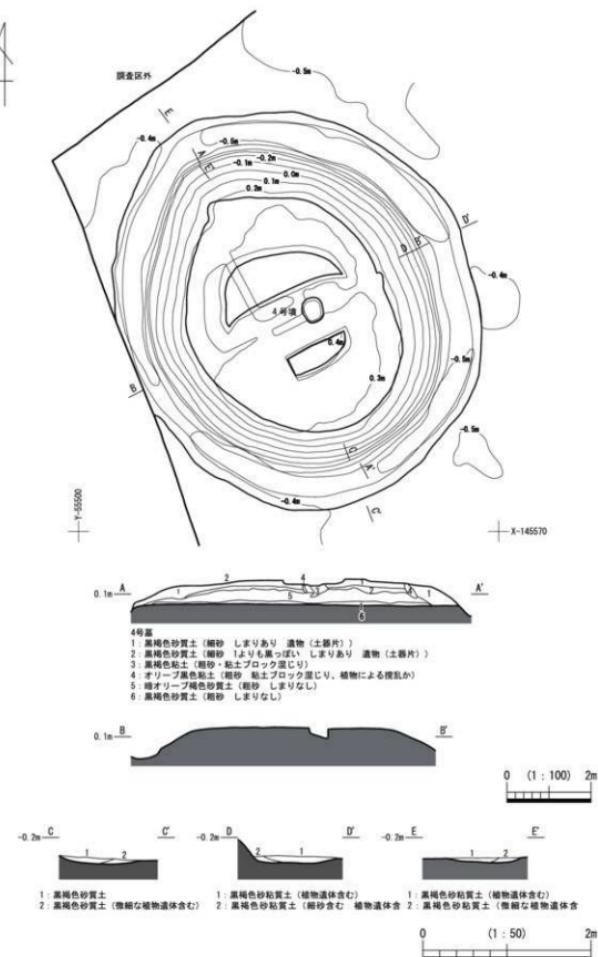
墳丘と周溝（第5図）

墳丘は直径約4.5mの円形だが、詳細に見ると、やや南北方向に伸びた梢円形になっている。周溝は墳丘を一周している。周溝の幅は60～70cmで深さは10cm程度である。周溝内に堆積した土は黒褐色砂質土が主体で未分解の植物遺体を含んでいる。この土は周辺に自然堆積している土に酷似していることから、周辺の土が流れ込んでいると思われる。

墳丘に盛られている土は、第4図19層の黒褐色粘土や21層の黒褐色砂質土と同質の土が主体になっていることから、周溝を掘る際に自然堆積層を掘り、その土を盛り上げて墳丘を作ったと推定されるが、周溝は非常に浅いため、周溝を掘った土だけでの墳丘を作ることは不可能で、盛り土のうち4層や5層のように、オリーブ黒色やオリーブ褐色で、周溝を掘った時には出てこないと思われる土は、周辺から運んできたと思われる。

第5図に墳丘断面図を示したが、このうち4層は植物による擾乱の可能性が高いため、墳丘に盛られた土は1層～3層、5層、6層の5層になる。これらのうち1層と2層は硬く締まっていることから、墳丘構築の最後の段階で全体を叩き締めたと考えられる。また、墳丘下面は平坦になっていることから、墳丘構築前に地面を整地して平坦にしたことも考えられる。

第3筋 発見された遺構と遺物



第5図 4号墳平・断面図

主体部（第6図）

主体部の検出は難航した。当初は墳頂で遺構を検出できなかつたため、主体部は残っていないと考えた。しかし、墳頂で須恵器の罐が出土したことから、念のためにトレンチを入れたところ、褐色砂質土や灰色粘土が広がっているのを確認し、鉄製品が埋まっているのも確認できたため、主体部は残っていると判断して、改めて主体部の検出に努めた。精査の結果、墳頂部に褐色の砂質土が広がり、その中に灰色の粘土が分布しているのを確認した。これは、1次調査で発見した古墳で舟形粘土棺を検出した時の状況に似ていたため、褐色砂質土が主体部の埋土で、灰色粘土は木棺を覆っていた粘土である可能性を考えた。

主体部と思われる褐色砂質土は $2.2\text{ m} \times 1.1\text{ m}$ の方形に広がっており、その中に $1.2\text{ m} \times 0.6\text{ m}$ の方形に灰色粘土が広がっていた。主体部の掘り込みは10cm程度で、掘削後すぐに遺物が出土した。期待した木棺は出土せず、結局、褐色砂質土の広がっている範囲が主体部で、灰色粘土が広がっている範囲が木棺が置かれた位置の可能性があると推定することしかできなかつた。

また、主体部の中に浅い土坑を検出し、中から木片が出土したが、性格は明らかにできなかつた。さらに、主体部の下で杭材が出土したが、これも主体部との関連や性格などは明らかにできなかつた。

出土遺物

第7図-1、2は主体部に埋葬された遺物で、3と4は主体部の埋土から出土した。1は大刀で、長さ92.6cm、幅3.6cmである。主体部の長軸方向に対して、やや斜めになつて出土したが、本来は長軸方向に平行して置かれていたと思われる。出土位置は、木棺の痕跡と思われる灰色粘土の分布範囲の外側であった。全体的に鋒部が著しいが、レントゲン写真では刀身が残っている状況を確認できる。外面には鞘と思われる木質が残っている。鍔は片闇の角闇で、基部には目釘を確認できる。2は片刃鉄鎌と思われる鉄製品である。

3は壺で、木棺の痕跡と思われる灰色粘土が分布する範囲の東側で出土した。胴部が横に張り出す寸胴の形態で、外面は風化により調整痕を観察しにくいか、なでてあると思われる。内面は底部に近い部分は横向方向にてあり、胴部中央付近は斜め上方向にて上げてある。なでの断面が曲面を描いて回んでいることから、指でなで上げていると思われる。この部分は、頭部をつけた後、もしくは頭部をつける直前では指が届かない部分なので、胴部を作っている途中でなで上げて整形したと思われる。胴部内面の頭部直下には指頭痕が残っている。壺の頭部は直線的に外側に広がつており、内面はなでてある。外面の調整は風化のため観察しにくいがなでてあると思われる。時期は古墳時代前期と思われる。

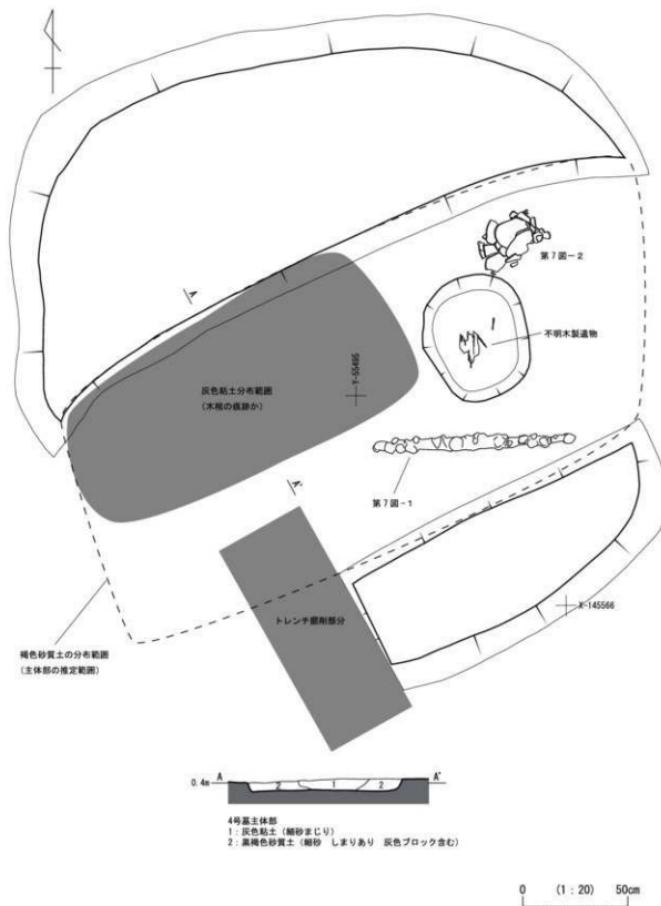
4は須恵器の罐で、横に張り出した胴部に連続した刻み目がついている。頭部が残っていないので、時期決定が難しいが、古墳時代前期と考へて良いであろう。5は甕か壺の底部で、外面はなでてあり、内面には指頭痕がわずかに見られる。底部から胴部に向かって大きく広がつてることと、底部に厚みがあることから、大きな胴部が想定される。この遺物だけで時期を特定することは不可能だが、主体部の埋土から出土したことから、他の遺物と同時期であろう。

6は主体部調査後、盛り土を掘削している時、主体部の下面から30cm程下で出土した木製品である。これが出土するまでの間、主体部下の盛土の中からばらばらに碎かれたような土器片が出土したため、主体部構築前に祭祀のようなことを行った可能性が考えられた。そこで、他の遺物や遺構の有無を精査したが、所を見得ることはできなかつた。盛り土の中にしつかりと差し込まれた状態で出土したことから、古墳に伴うことは間違いないが、主体部との関連や性格は明らかにできなかつた。

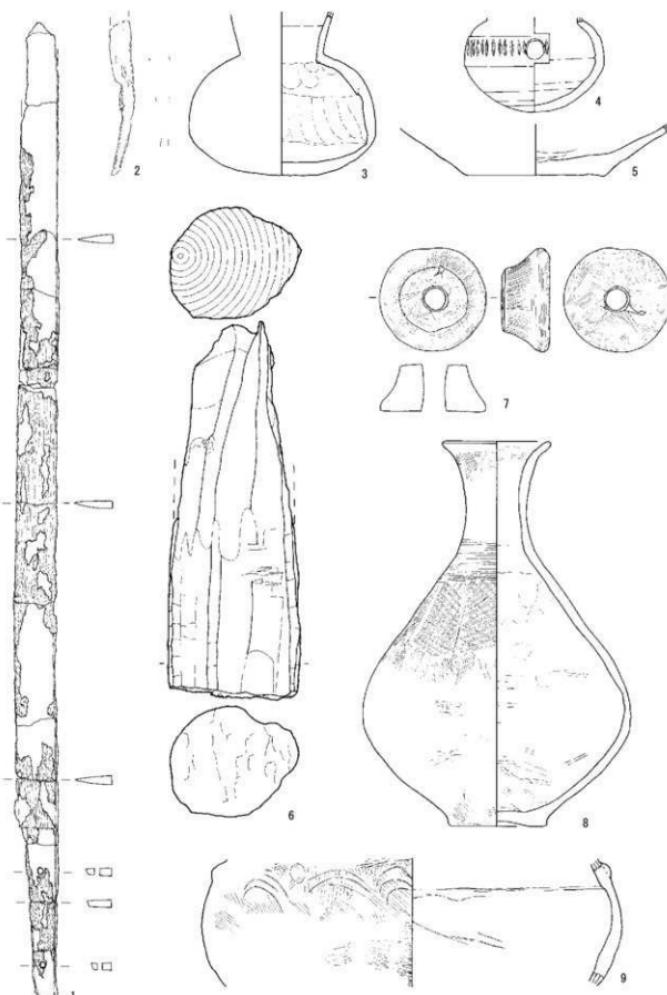
この木製品は、長さ54.6cmほどの円柱状を呈する針葉樹の芯持材で、上部は腐食により痩せているが下方部は最大径が19cmほどある。側面には幅1.3cmほどの面調整の割りがある。下面是平坦に加工され、二方向から刃物が入れられているのがわかる。形状から柱根と思われる。

7は石製鍛錘車で、主体部の埋土から出土した。全面を磨いてある。

第3図 発見された遺構と遺物



第6図 4号填主体部平・断面図



第7図 4号墳、31号墓、32号墓出土遺物 (1、6:1/6、2:1/2、3~5、8、9:1/3、7:2/3)

2 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓を12基、土坑を1基、土器棺を2基検出した。第3図で4号墳以外は弥生時代の遺構で、調査区の東側に集中する傾向がある。標高は全体的に1m以下の所が多く、場所によっては海面下の所もあり、隣接する太田川からの涌水が激しい。現在の太田川は江戸時代の河川改修によって作られた流路で、弥生時代には現在よりも東側を蛇行しながら流れていると考えられている（第1図）。方形周溝墓の構築時、現在よりも川から離れていたとは言え、海に近い所で標高が1m以下、場所によっては海面下と言う状況から、方形周溝墓の構築時にも涌水があったか、もしくは湿地に近い環境で、時には洪水に見舞われることもあったと考えられる。方形周溝墓はすべて周溝の四隅が切れる形態である。なお、方形周溝墓とその周溝の番号は2次調査からの連番にしてある。

（1）方形周溝墓

30号墓（第8図）

方台部の検出は比較的容易であったが、頂部は後世の削平を受けているため、主体部は検出できなかつた。方台部の半分近くが調査区外に出ているため、全体の形はわからないが、やや歪んだ方形になっていると思われる。方台部に盛り土は見られず、流出した可能性もあるが、周溝を掘った土だけでの規模の方台部は作れないため、周溝を掘った土を方台部に盛り上げたとしても、それは頂部付近だけで、方台部の基本形は削り出して作ったと思われる。

周溝は25cm程の深さで、黒褐色砂質土や黒褐色粘土といった、周辺に自然堆積している土が流れ込んでいる。

31号墓（第9図）

方台部の検出は比較的容易であったが、頂部は後世の削平を受けているため、主体部は検出できず、方台部からはほとんど遺物が出土しなかった。方台部の半分近くが調査区外に出ているため、全体の形はわからないが、かなり歪んだ方形になると思われる。これも方台部に盛り土は見らなかつた。盛り土が流出した可能性もあるが、周溝を掘った土だけでこの方台部は作れないため、周溝を掘った土を方台部に盛り上げたとしても、頂部付近だけで、方台部の基本形は削り出して作ったと思われる。

周溝は25cm～35cm程で、黒褐色粘土や黒色粘土といった、周辺に自然堆積している土が流れ込んでいる。周溝のうちSD468は30号墓と共有になっており、この溝から壺（第7図-8）が出土しているが、どちらの周溝墓に伴うのかわからない。

第7図-8は細部の壺である。底面外側は丁寧になでてわずかに上げ底になっている。胴部下半の外側は風化が進んでいるが、底部付近に下から斜め上方向に描きあげた刷毛目が見られ、胴部下半には横方向の刷毛目が見られる。胴部上半には櫛描文があり、施文方法は下記の通りである。

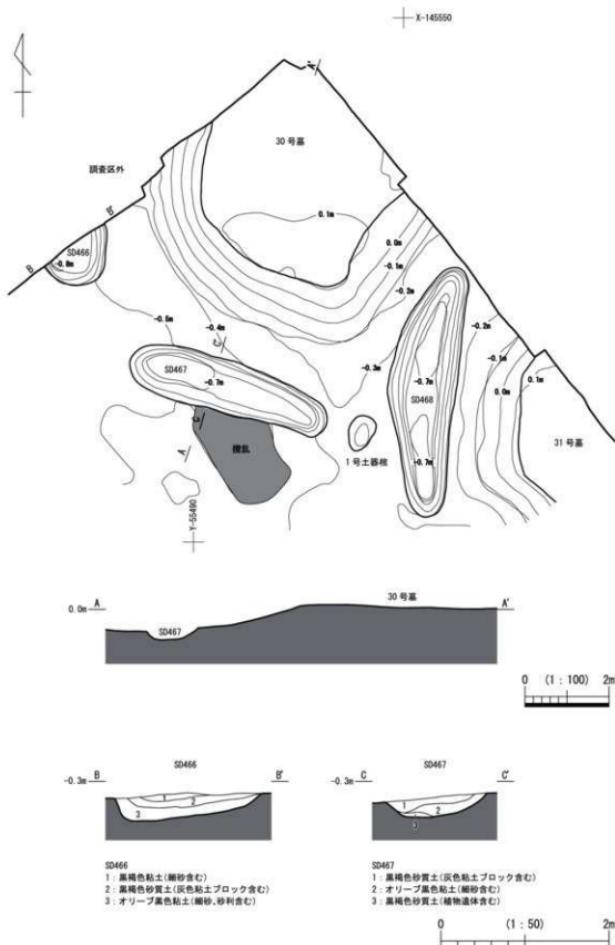
最初に頸部直下に横方向の櫛描文を入れて土器を一周させている。次にこの櫛描文から土器の器面に沿って縦方向の沈線を入れている。この沈線は、図示したように5本が平行して櫛描文に見える部分もあれば、後に描く格子状の沈線帯を区画して隙間を空けるために、平行する2本の沈線を入れているだけ部分もある。この縦方向の沈線は3cm～4cm間隔で入っており、土器の残存部分で6単位認められる。おそらく全体で8単位入っていたと思われる。

最後は、上記の縦方向の沈線で区画した間に格子状の沈線文を入れて文様帯を作っている。

頸部外面は、下から描き上げる方向で、縦方向の刷毛目が入っており、口縁部は外反している。

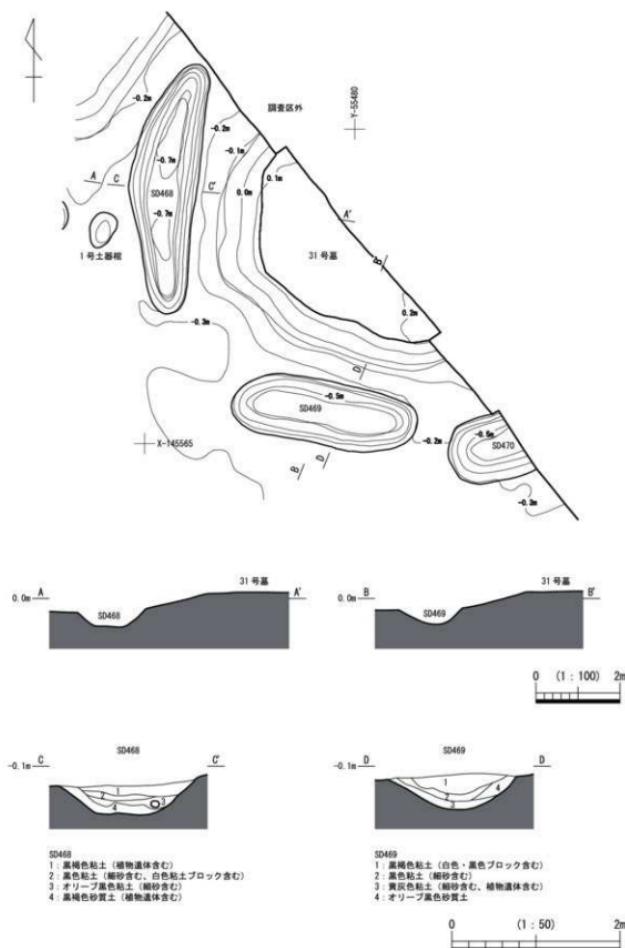
土器の内面は、頸部内面はなでており、胴部上半は指頭痕が残っている。胴部中央の張り出した部分は横方向に、おそらく工具を使ってなでている。胴部下半の内面は摩減しているが、斜め上に描き上げるような刷毛目が残っている。時期は弥生時代中期後葉と思われる。

第3図 調査の結果



第8図 30号墓平・断面図

第3図 発見された遺構と遺物



第9図 31号墓平・断面図

32号墓（第10図）

涌水のため、周溝の検出が難しく、南側の周溝は検出できなかった。半分近くが調査区外に出ているが、方台部は長方形になると思われる。盛り土が見られなかつたため、流出したか、方台部上面が削平を受けていると考えらたが、方台部で壺の胸部（第7図-9）が出土したことから、もともと盛り土はなかつたのかもしれない。周溝は深さ20cm程度、黒色粘土や黒色砂質土といった周辺に自然堆積している土が埋土になっている。

第7図-9は壺の胸部で、外面下半に横方向の刷毛目、上半には斜め方向の刷毛目が見られる。胸部上半には、刷毛調整の後に三条の弧状沈線が入っている。また、粘土を貼り付けたボタン状の突起が2箇所見られる。内面は工具を使ってなでてあると思われ、工具の端部が当たった痕跡が付いている。時期ははつきりしないが、弥生時代中期後葉と思われる。

33号墓（第11図、第12図）

方台部は歪んだ長方形で、四隅に周溝がめぐらっている。周溝のうちSD473は涌水により検出が困難だった。方台部には黒褐色砂質土や黒色砂質土の盛り土が見られる。これらの土は周辺に自然堆積している土で、周溝を掘った土を盛り上げていると思われる。また、盛り土を除去した後、平坦な地面が現れたことから、方台部に土を盛る前に整地をしている可能性がある。

周溝は深さ20cm～30cmで、黒色砂質土、黒褐色粘土と言った周辺に自然堆積した土が埋土になっている。いずれも自然堆積である。

34号墓（第11図、第12図）

今回調査した方形周溝墓の中では、比較的検出が容易で、遺物包含層を掘り下げている途中で方台部の頂部を検出したため、そのまま遺物包含層を掘り下げながら方台部を露出させていく方法で検出した。周溝は南側と東側で検出されたが、西側では検出できなかつた。周溝のうちSD475は隣接する33号墓と共有している。方台部には盛り土が見られ、黒褐色砂質土やオリーブ黒色砂質土といった、周辺に自然堆積した土に酷似した土であることから、周溝を掘った土を盛り上げていると思われる。盛り土の下は平坦になっていることから、方台部構築時に土地を平らに整地してから土を盛っていると思われる。

周溝は深さ25cm～35cmで黒色粘土、黒色砂質土といった周辺に自然堆積している土が埋土になっている。いずれも自然堆積である。

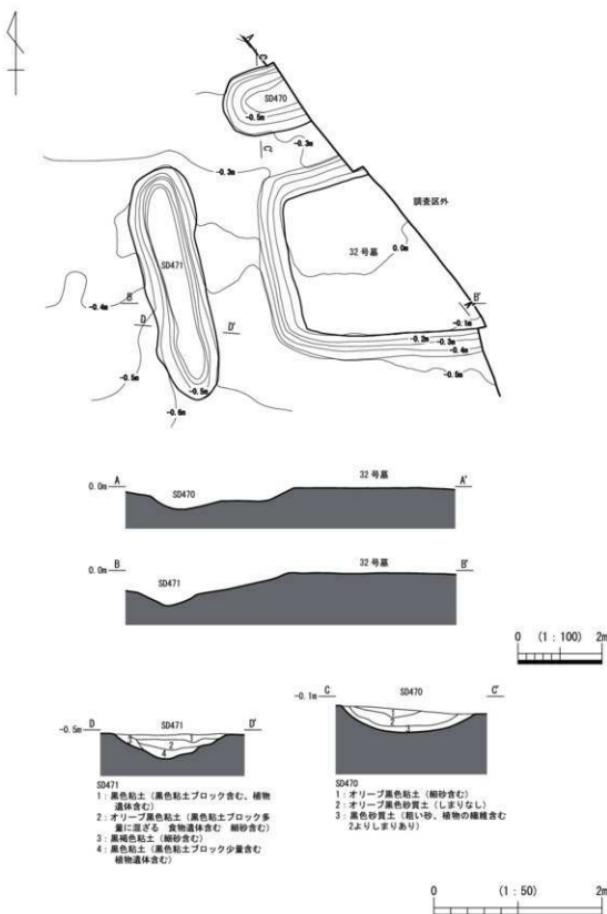
遺物は今回の調査でもっとも多く出土している。第13図-1は細頭の壺である。底部付近には下から上に向かう刷毛目を観察できるが、底部端部まで刷毛目が付いていることから、下からの搔き上げではなく、調整時に土器を倒立させて底部から胸部に向かって刷毛目調整をしたと思われる。胸部下半には、右から左に向かう横方向の刷毛目が見られる。胸部上半～頸部は風化のため調整痕を観察しにくいか、頸部上半は縦方向の刷毛調整の後でなでており、頸部は刷毛調整なしでなでてあると思われる。底部に近い部分に、焼成後の穿孔がある。

内面下半には右から左に向かう横方向の刷毛目が見られる。指頭圧痕も残っており、その部分には刷毛目の原体が当たらずに刷毛目が途切れている。胸部中央付近の内面はなでてあり、頸部直下には指頭圧痕が見られる。頸部内面はなでており、絞りの痕跡も見られる。時期は弥生時代中期後葉であろう。

2は甕で、胸部下半外面は風化により調整がはつきりしないが、なでて仕上げていると思われる。胸部中央～頸部には下から上に向かう刷毛目が見られる。胸部内面はなでて仕上げており、頸部内面は右から左に向かう刷毛目が見られる。方形周溝墓から出土した遺物だが、古墳時代前期と思われる。

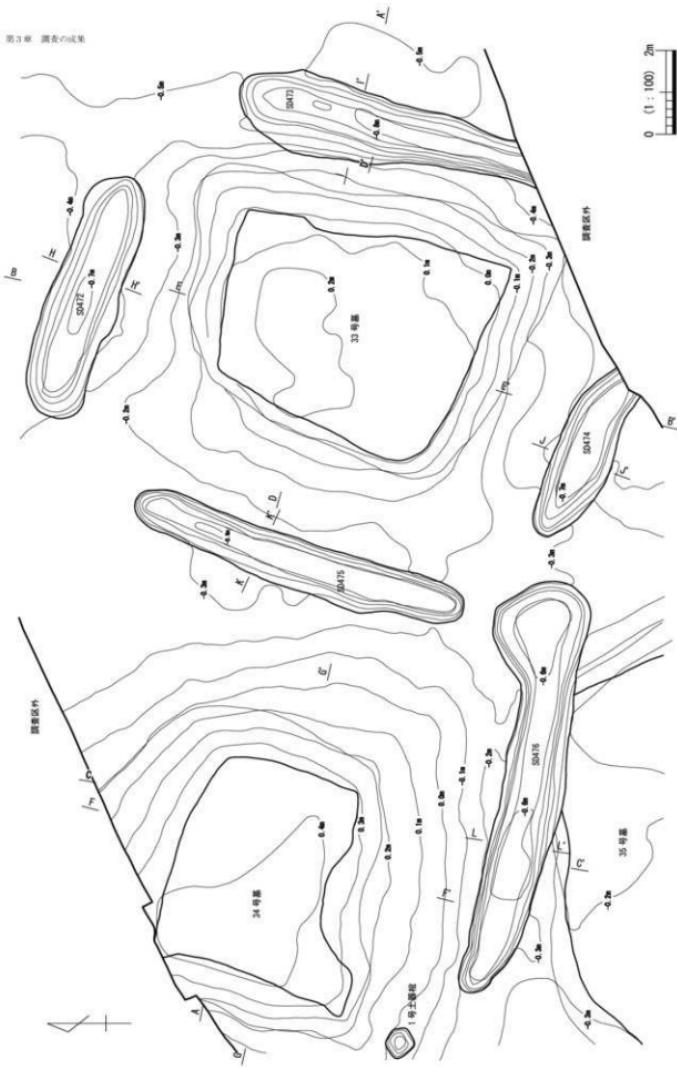
3は高杯の脚部で、外面には縦方向に刷毛目が残っている。内面には指頭圧痕が見られる。また、外側からの穿孔が見られる。4は台付甕の脚部で、外面は下から上方向の刷毛目の後でなでて仕上げている。内面には指頭圧痕が残っている。

第3図 発見された遺構と遺物

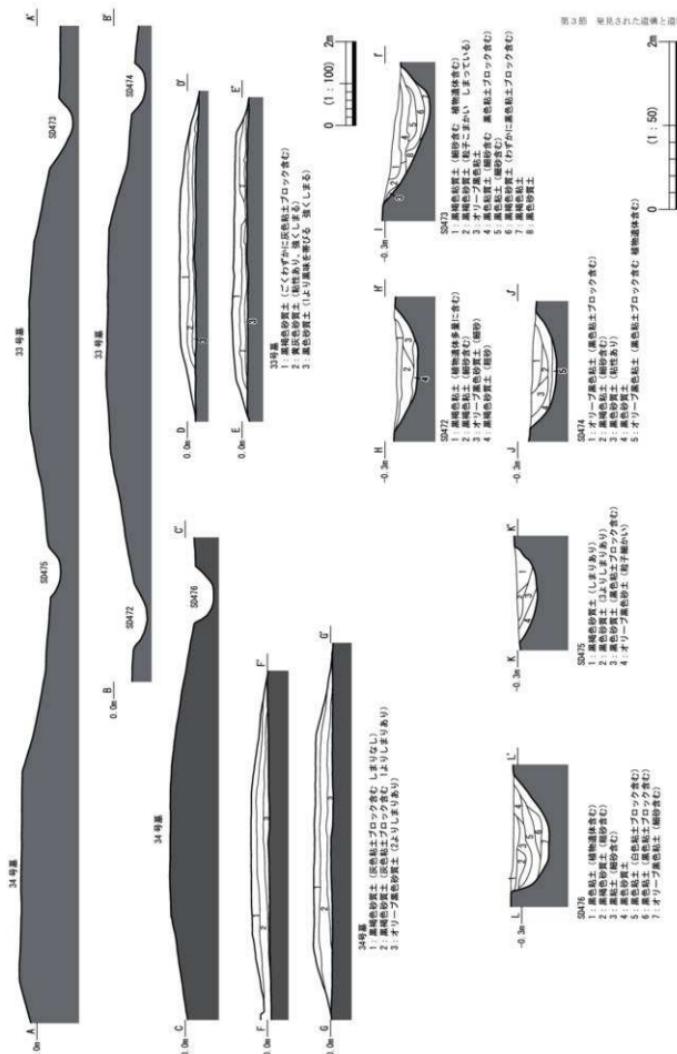


第10図 32号墓平・断面図

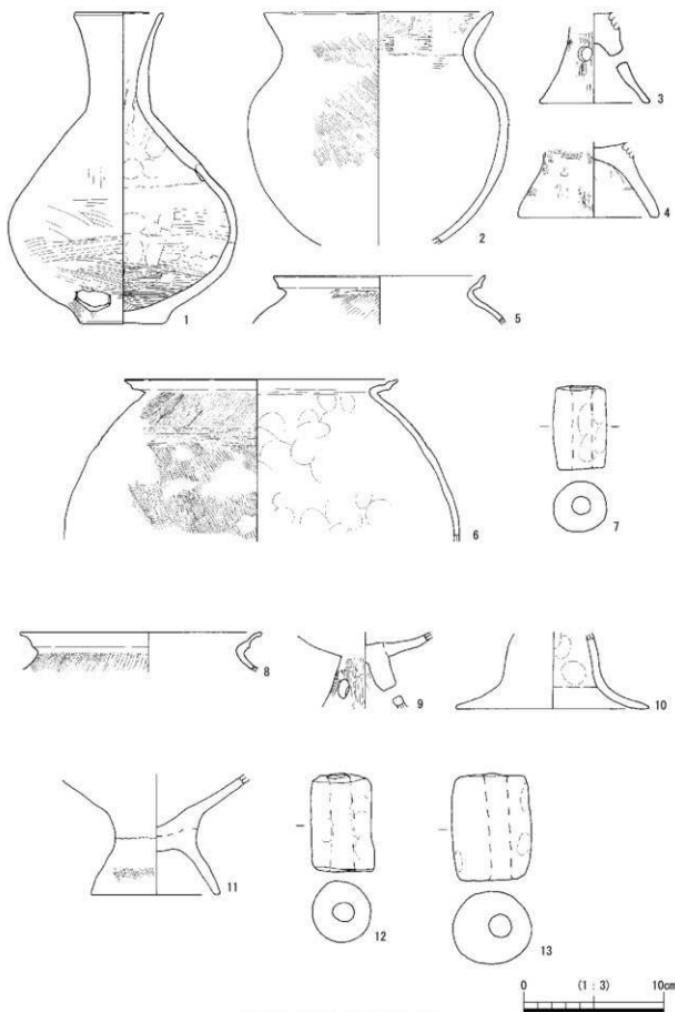
第3章 調査の収集



第11圖 33號墓、34號墓平面圖



第3章 調査の成果



第13図 34号墓、36号墓出土遺物

5は口縁部が「S」字になる甕で、外面には左斜め下に向かう刷毛目が見られる。口縁端部は外反している。口縁部が「S」字になるこの甕の特徴で、器壁が薄い。

6も口縁部が「S」字になる甕で、口縁部は内外面とも横なでで仕上げてあり、口縁端部はつまみ上げて外半させ、5よりも口縁部が水平に近くなっている。口縁と胴部の接続部は急角度で屈曲している。胴部外面は、口縁部直下の刷毛目は左斜め下方向に払うようについているが、胴部と口縁部が屈曲して狭くなった部分にまで刷毛目が付いている。この狭い部位に刷毛目の原体が入り込むとは考えられないことから、口縁部をつける前に胴部の刷毛目調整を行い、その後で口縁部を付け足したと思われる。胴部が膨らんだ部分の外面には、下から左斜め上に搔き上げる刷毛目が見られる。土器を正立させた状態で下から左斜め上に搔き上げる調整は不自然で、土器を倒立させた場合には、胴部の膨らんだ部分から口縁に向かってしぶんていいく部分に刷毛目を付けることになるため、やはり、不自然な動作を想定しなければならない。土器を左手で小脇に抱えて、右手で胴部中央から口縁部に向かって刷毛目を付ける動作を想定すれば、下から左斜め上に向かう刷毛目を復元できる。この想定が正しいとすると、口縁部と胴部の屈曲部から左斜め下に払うようつけられた刷毛目は、土器を成立させた状態で付けたと考えるのがもっとも自然なことから、この土器の外面に見られる方向の違う刷毛目は異なる工程で付けられたことになる。刷毛目の切り合いから、胴部から口縁部に向かう刷毛目が先に付けられ、口縁部と胴部の接続部分から左下に払う刷毛目が後で付けられたことになる。そして、最後に両方の刷毛目を切って横方向に櫛描文がつけられている。胴部外面には指頭圧痕が残っている。これも器壁が大きさに比べて薄く仕上がっている。

2～6は、この方形周溝墓から出土した遺物だが、古墳時代前期の遺物であることから、方形周溝墓が古墳時代になって再利用されている可能性が考えられる。

7は土錐で、外面に指頭圧痕が残っている。

35号墓、36号墓（第14図）

35号墓としたものは、方形周溝墓と思われる高まりを検出したもので、周溝は検出できていないうえに遺物も出土していないことから、洪水でほとんどが流出した方形周溝墓か、遺構ではない可能性も考えられる。

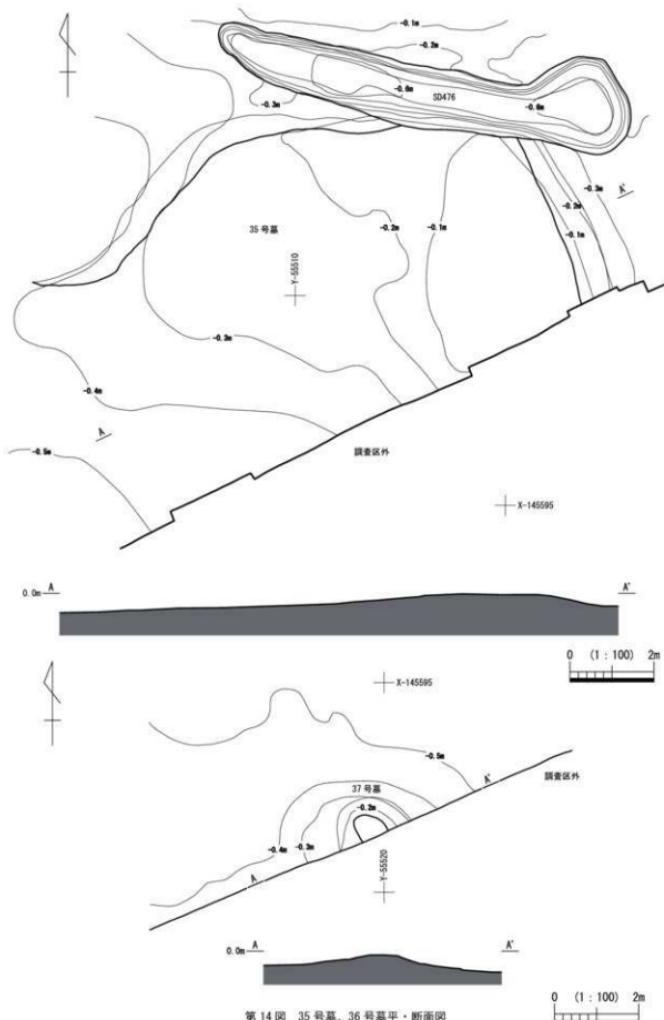
36号墓も35号墓と同様に、地形の高まりを検出したもので、周溝は検出できなかったが、周囲の状況から方形周溝墓の残骸の可能性を考えた。しかし、下記のように、出土遺物を見ると古墳の可能性が考えられるが、直径2m程度の高まりであるため、古墳とも言い難い。

出土遺物を第13図-8～13に示す。8は口縁部が「S」字になる甕で、口縁は強く外側につまみ出して、水平に近くなっている。頸部外面は横方向になでており、頸部直下には、左斜め下に向かう刷毛目が見られる。内面は全面なでで仕上げている。9は高杯で杯の底面付近と脚部との接続部が残っている。杯は内外面ともなでで仕上げている。脚部の外面には、磨きが見られ、内面には指の痕跡と思われる調整痕が残っている。また、三箇所に穿孔が見られる。10は高杯の脚部で脚端部が大きく外反する特徴がある。摩滅が著しく調整痕ははつきりしない。これは古墳時代中期まで時期が下がると思われる。

11は台付き甕で、甕の底部と脚部が残っている。口縁部が「S」字になる甕が付いていた可能性がある。脚部外面には刷毛目が残っているが、調整の方向は風化のためはつきりしない。甕の外面はなでて仕上げてある。脚部内面はなでて仕上げてあり、一部に指頭圧痕が残っている。甕の部分は内外面ともになでて仕上げてある。時期は古墳時代前期である。

この報告では、36号墓を方形周溝墓の可能性があるとして報告しておくが、上記のように、出土した遺物はいずれも古墳時代前期～中期であることから、32号墓のように方形周溝墓が古墳時代に再利用された可能性と、本来古墳であった可能性の両方を指摘しておく。12と13は土錐である。

第3図 調査の結果



37号墓（第15図）

方台部は、中央に大きな搅乱が入っているものの検出できたが、方台部に盛り土は確認できなかった。周溝は涌水が激しく検出が非常に難しかった。特にSD477は端部しか検出できなかった。周溝は深さ30cm～35cmで黒褐色粘土や黒褐色砂質土といった周辺に堆積している自然堆積層が流れ込んでいる。

38号墓（第16図）

調査区の端で高まりを検出したもので、盛り土や周溝は確認できなかつたが、方形周溝墓の可能性があるため掲載した。この調査区の北側には2次調査時の15区が隣接しており、本来なら今回の調査区と15区を連結すべきで、そうすれば38号墓も全体像を把握できたと思われるが、15区が埋め戻されないまま溜池になっているため、15区と今回の調査区の間に安全確保用の間隔をとらざるを得なかつた。したがって、15区と今回の調査区の間には未発掘（発掘不可能）の部分がある。

39号墓（第17図）

調査区の北端で検出した方形周溝墓で、半分近くが調査区外に出ている。これも38号墓と同じ理由で全体を把握することはできなかつた。周溝を検出できたため、方形周溝墓とわかつたが、方台部は後世に削平されたらしく残つていなかつた。周溝の深さは15cm程で、黒褐色粘土や黒褐色砂質土といった周辺に自然堆積している土が流れ込んでいる。

40号墓（第17図）

これも周溝を検出したことで方形周溝墓とわかつたが、方台部は削平されたらしく残つていなかつた。周溝のうちSD480は39号墓と共有している。周溝は10cm～20cmで黒褐色粘土や黒褐色砂質土といった周辺の自然堆積層が流れ込んでいる。

41号墓（第16図）

調査区の端で周溝と思われる遺構を1本検出しただけだが、方形周溝墓の周溝の可能性が高い。深さは15cm程で、黒褐色粘土や黒褐色砂質土といった周辺に自然堆積している土が流れ込んでいる。

(2) 土器棺**1号土器棺（第18図～第20図）**

方形周溝墓34号墓の方台部斜面の直上で検出したもので、図面では方形周溝墓34号墓に伴う土器棺のように見える（第11図）が、34号墓構築以後に埋葬されたものである。土器よりも二周りほど大きい土坑に寝かせた壺に壺で蓋をしてある。

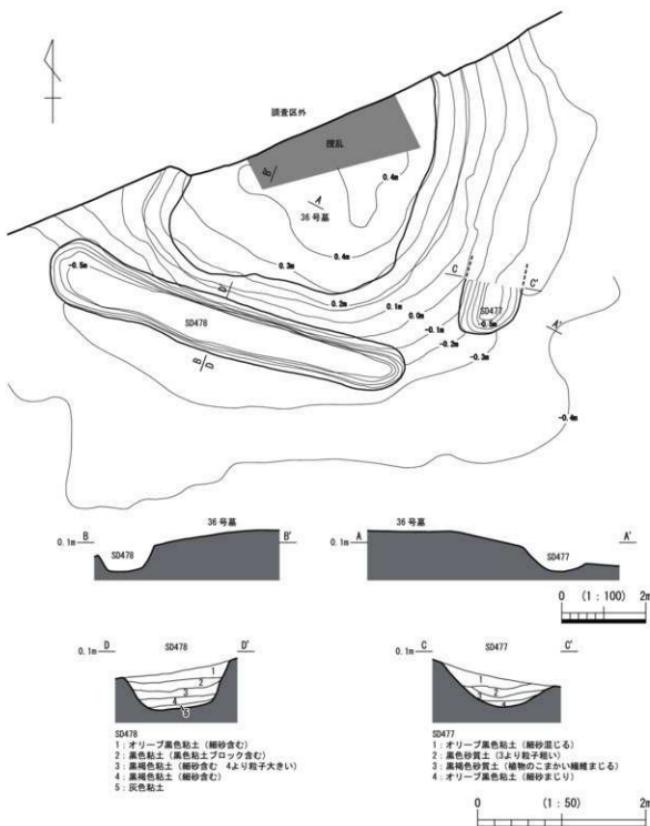
身は頸部を欠損した壺を使っている（第19図）。棺に使っていることから、おそらく意図的に頸部を欠損させた土器を使っていると思われる。胴部の中央が大きくならむ形態である。

この土器では、外面に見られる刷毛目の切り合いと調整方向から、下記のような刷毛目による調整工程を復元できる。

1 底から胴部下半に向かって刷毛目を入れる。刷毛目が底部ぎりぎりまで入っており、土器を正立させた状態でここまで刷毛目を付けることは不可能なため、この時点では土器を倒立させた状態で刷毛目を入れていると考えられる。

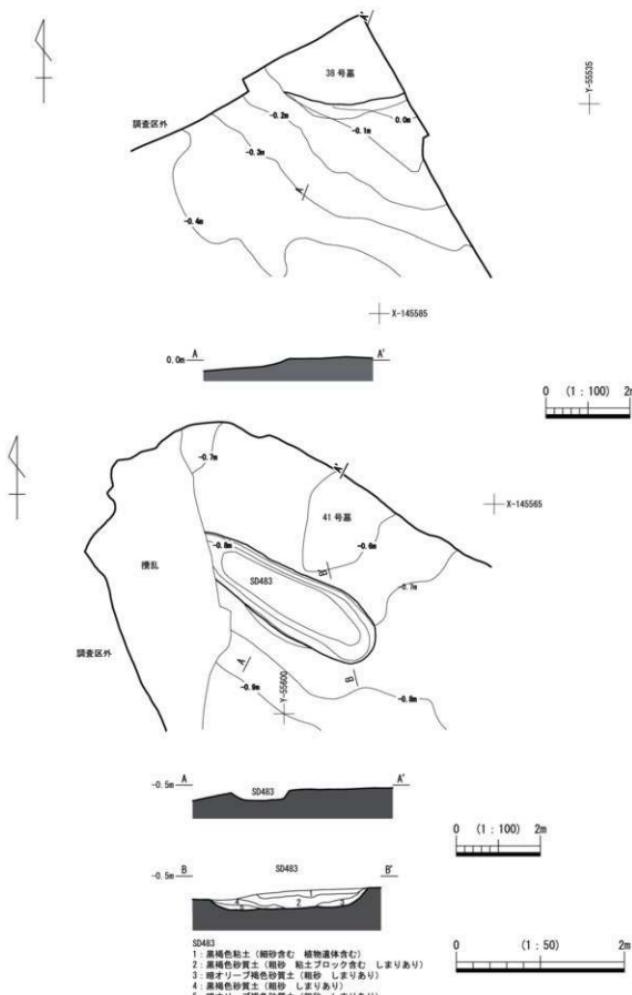
2 脇部中央～下半に横方向の刷毛目を入れる。底から胴部に向かう刷毛目を切っていることから、これが次の工程である。この刷毛目の方向は、第19図の図面上では左から右である。土器を正立させた状態でこの刷毛目を付けたとするなら左利きの動きになるが、土器内面の刷毛目は、右から左への動きで、これは右利きの動きである。土器の内面は、土器を正立させた状態でしか調整できないため、この土器の作り手が右利きだったことは間違いない。したがって、胴部に見られる左から右への刷毛目調整を右利きの作り手が行ったとすれば、これは底部付近の刷毛目調整に引き続き、土器を倒立させて行った可能性が高い。

第3図 調査の成果



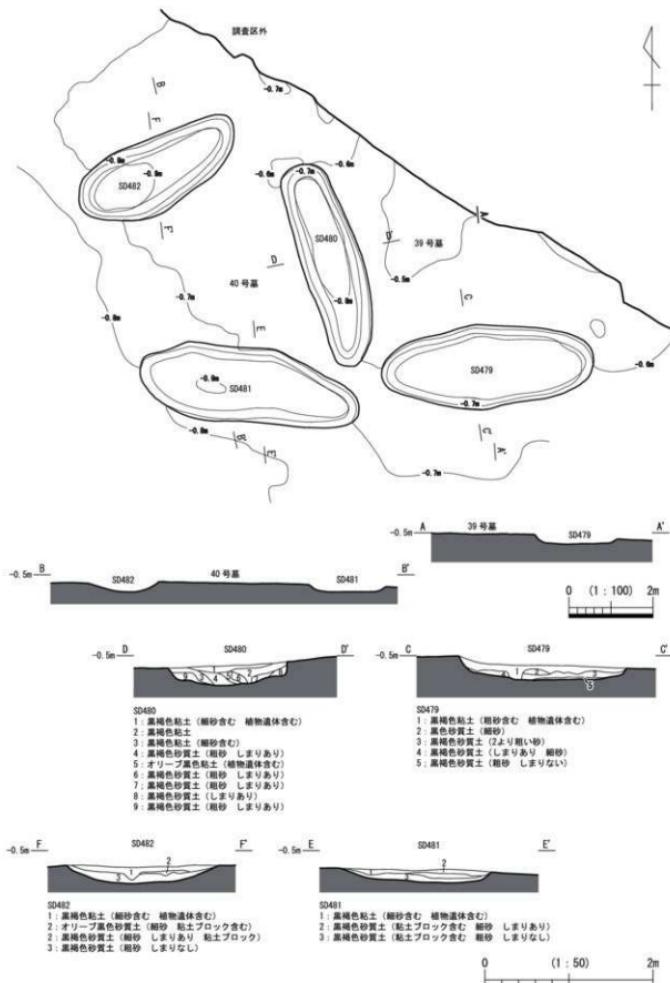
第15図 37号墓平・断面図

第3筋 発見された遺構と遺物

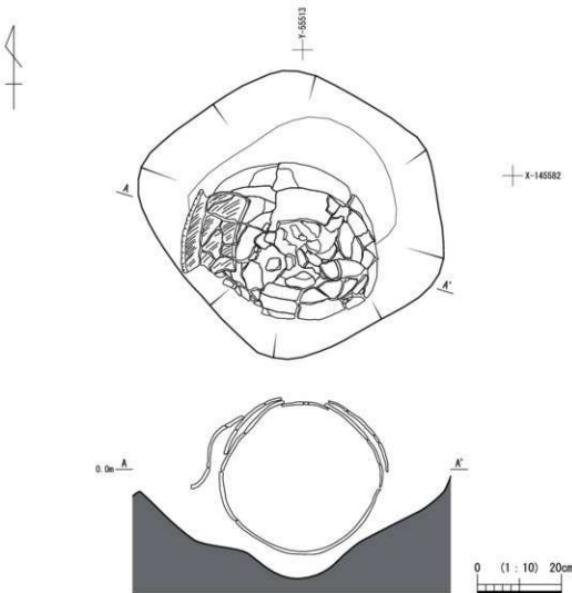


第16図 38号墓、41号墓平・断面図

第3章 調査の成果



第17図 39号墓、40号墓平・断面図



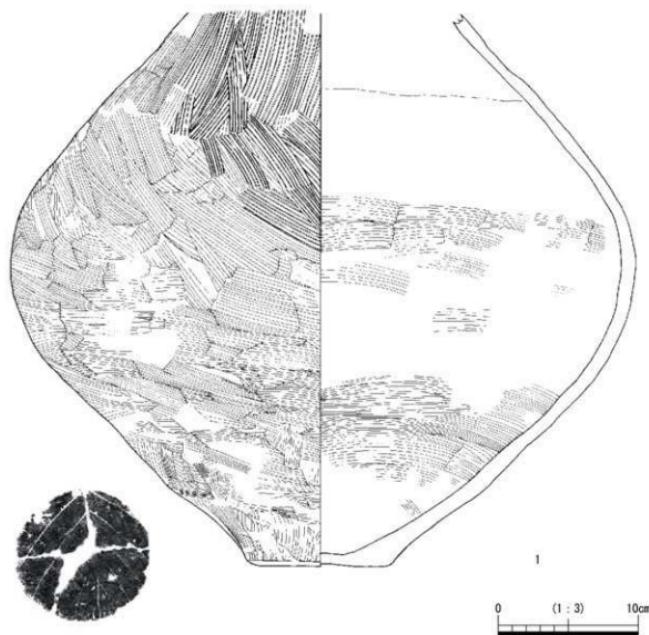
第18図 1号土器棺平・断面図

3 脊部上半に斜め方向の刷毛目を入れる。脊部上半に見られる斜め方向の刷毛目が、脊部中央にある横方向の刷毛目を切っていることから、この工程が次の工程になる。この刷毛目は左斜め上から右斜め下に向かっていることから、土器を成立させた状態ならば左利きの動きだが、上記のように、この土器の作り手は右利きと考えて間違いない。したがって、この工程も土器を倒立させた状態で行ったと考えられ、下から左斜め上に搔き上げるように刷毛目を付けたと想定できる。

4 脊部上半の蓋の頭部に近い部分に刷毛目を付ける。この刷毛目は脊部上半に見られる斜め方向の刷毛目を切っている。おそらくは頭部から連続する刷毛目調整であろう。この刷毛目は第19図の図面上で左下に払う動きで、上記までの工程のように土器を倒立させた状態でも付けることはできるが、頭部の膨らみが邪魔になるため、土器を成立させた方がはるかに刷毛目調整しやすい。ここは1~3までの工程とは異なり、土器を成立させて刷毛調整を下と考えた方が合理的である。

上記の所見から、この土器は当初倒立させた状態で底部~脊部上半を調整し、最後に成立させた状態で頭部直下を調整したと考えられる。

内面は右から左への横方向の刷毛目が見られる。内面は土器を正立させた状態でしか調整できないことから、この土器の作り手を右利きと判断した根拠である。底部には木葉痕が残っている。時期は弥生時代中期後半である。



第19図 1号土器核実測図 1

蓋は口が大きく開いた寸胴の壺(第20図)を使っている。口縁部にはほぼ等間隔で、薄い板状のものが、細い棒状の工具を押し当てた刻み目が入っている。

胸部外面の調整は、刷毛目の始点に見られる原体の端部が当たった痕跡と、刷毛目の終点に見られる引きずった粘土の盛り上がりから、右下がりの刷毛目調整であることがわかる。土器を正立させた状態ならば、左利きの動きになるが、下記の通り、土器を成立させた状態でしか調整できない内面の刷毛目は右利きの動きであることから、胸部外面の調整は土器を倒立させた状態で口縁に向って調整したと考えられる。特に胸部下半のすぼまつ部分の調整は、土器が正立した状態よりも倒立させた方が調整しやすいことからも胸部の調整は土器を倒立させて行ったと考えるのが合理的である。

胸部に対して口縁直下～頸部は下向きの刷毛目調整で、これは土器を正立させた状態で行うことができる。のことから、口縁直下～頸部と胸部では、調整時の土器の向きが異なっていたと想定できる。

内面は口縁直下～頸部は右から左に向かう刷毛目調整で、胸部の内面はなでて仕上げてある。時期は弥生時代中期後葉である。



第20図 1号土器核実測図2

2号土器（第21図～第22図）

方形周溝墓の30号墓と31号墓の間で検出した。

第21図の下段に示したのが蓋に使われた蓋である。口縁直下に棒状工具による押圧が見られる。外側の調整は右下がりの刷毛目である。内面は口縁直下～頸部が左向きの刷毛目で、胴部はなでてある。

第22図は身として使われた蓋で、頸部中央に穿孔がある。口縁端部にはなでによる面取りがあり、口縁部外面に縱方向の沈線を等間隔で入れた後、右斜め下方向の沈線を入れた格子状の文様が見られる。また、頸部には隆帶を貼り付け、刷毛目原体の端部による押圧が見られる。押圧は右に傾いた楕円形で、後述の調整痕からも読み取れるように左利きの作である。隆帶が剥がれた部分に刷毛目が見られることから、器面調整が終わった後で隆帶を貼り付けたことがわかる。

頸部外面の調整は、下記の通りである。

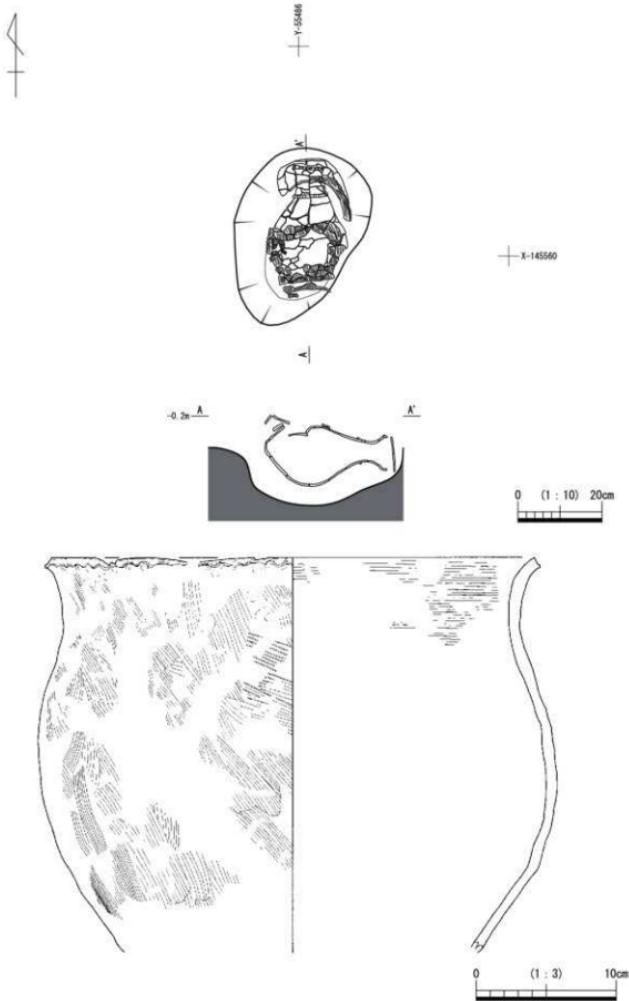
1 底部から左斜め上に向かう刷毛目調整をしてある。土器が正立した状態では調整できない底部の端部に刷毛目が付いていることから、この部分の調整時には土器は正立していなかったと想定できる。

2 頸部中央～下半に右斜め下方向の刷毛目調整をする。この刷毛目調整は、横方向の帯状に複数の単位が認められ、刷毛目端部の粘土の盛り上がりが明瞭に残っていることから、下から順に調整したことが読み取れる。この刷毛目調整の後、帯状単位の境界に縱方向、下向きの刷毛目を入れている。

3 頸部上半に刷毛目調整をする。ここでは左斜め下方向と右斜め下方向の両者が見られる。

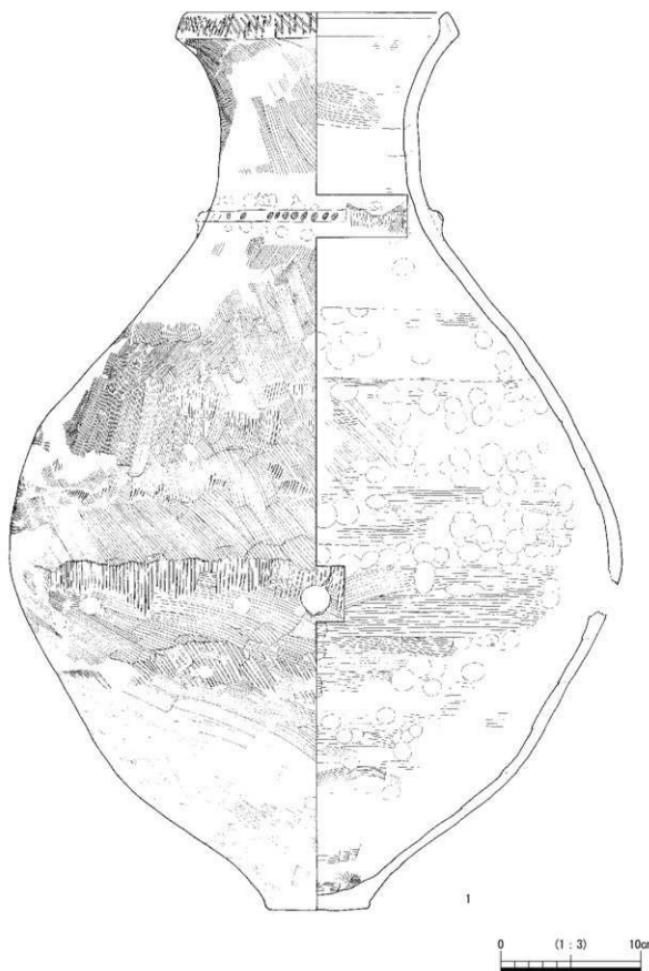
4 頸部外面に右下がりの刷毛目調整をする。

頸部内面に右向きの刷毛目、頸部外面と胴部下半に見られる右下がりの刷毛目は、左手の方が付け易いことから、この土器の作者は左利きだった可能性が高い。土器の時期は弥生時代中期後半である。



第21図 2号土器棺平・断面図、2号土器棺実測図 1

第3形 発見された道標と遺物



第22図 2号土器核実測図2

(3) 土坑

土坑1 (第23図、第24図)

17区の南端で検出した土坑である。この土坑からは、多くの遺物が出土した。

出土遺物を第24図に示す。1は甕で口縁が大きく外反している。外面はほぼ全面に刷毛目が見られ、内面にはなでと思われる調整痕があり、工具端部の当たりが見られる。弥生時代中期と思われる。

2は壺の頸部へ口縁で、外面には細かい磨き、内面には絞りの痕跡がある。時期は弥生時代中期であろう。

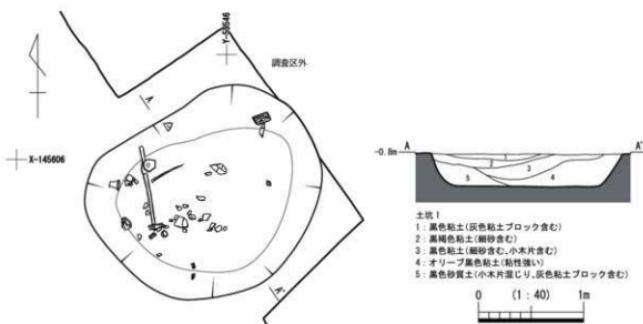
3は高杯で、杯の外面は刷毛目の後でなでて仕上げている。杯の内面には、細かいミガキが見られる。

脚部との境界には棒状の工具で刻み目を入れた突帯が見られる。時期は弥生時代後期と思われる。

4は刈払具¹⁾である。長さ75.3cm、最大幅は7.2cm、基部の厚みは最大3.6cmほどある。樹種はイチイガシ（アカガシ亜属）の柾目材である。ほぼ完形品に近く、柄は端部まで残っている。刈払具は一本で作られた製品で、柄と身の部分からなる。柄の断面は橢円形状を呈し、上端部は丸く成形してある。柄の全体は側面から見ると正面側に僅かに反っている。柄から身にかけての基部はなで肩でやや厚みがある。身部は肩より下方の正面側が緩く湾曲するように大きく削られており、さらに下方に向かって1.0cmほどと薄くなっている。この鋸の特徴は身の両側面に刃部があることで、本品も正面からみて左側が薄く削られて刃を作り出している。右側面と下端部は欠損している。もともと下端部にも厚みを持つが、本品は両側面を使い込んでいるうちに摩耗して身の中央部で折損したものであろう。

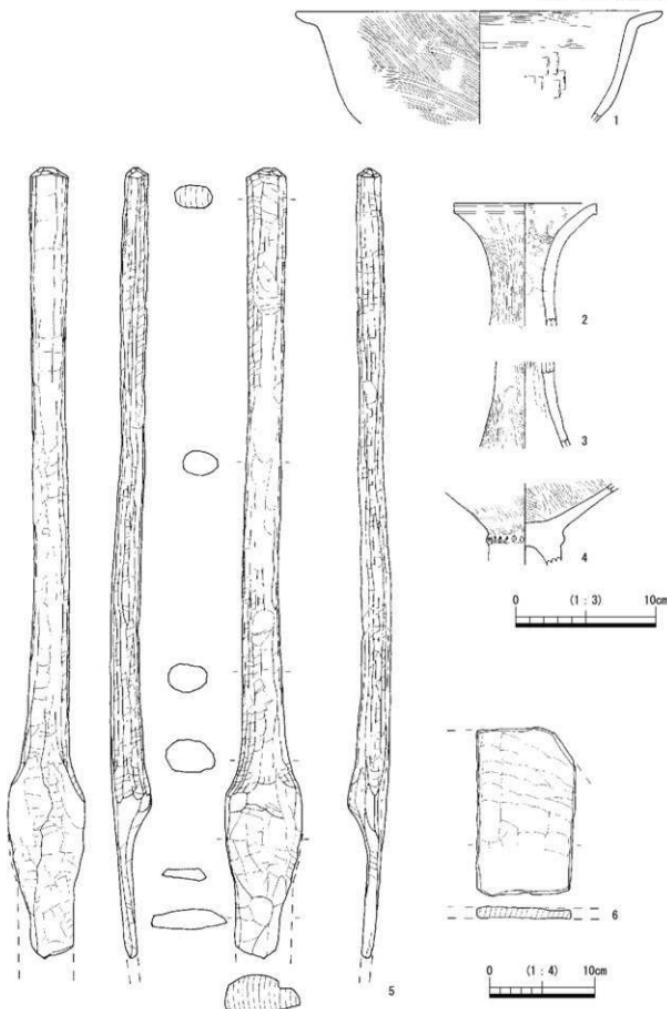
刈払具は、県内では浜松市桜子遺跡、同市角江遺跡、御前崎市（旧浜岡町）南谷遺跡、藤枝市寺家前遺跡などで出土例がある²⁾。年代は弥生時代中期から後期に属するもので、5も弥生時代中期である。

6は広鉗の身、もしくは鎌身と思われる木製品である。左右側面が欠損しているため、残存長は16.0cm、残存幅は9.4cm、厚みは1.1cmの広葉樹材の柾目板である。表裏両面とも面調整された痕跡が残り、柾目板の状態品に加工していることが解る。樹種同定の結果、本品は強靭なイチイガシ（アカガシ亜属）を用いていることから、農具の鍛または鎌の破片である可能性が高い。静岡県内で出土する鋸・鎌の農耕具は、広葉樹材の柾目板で作られている。なかでもアカガシ亜属が最も多く使われ、次いでコナラ節かクヌギ節などで作られている。右肩を斜めに加工し、下方4cmほどの部分が薄くなっていることから、広鉗の身、もしくは鎌身のどちらかであると考えられる。



第23図 土坑1平・断面図

第3図 発見された遺構と遺物



第24図 土坑1出土遺物

3 包含層の出土遺物

弥生時代中期の遺物（第25図）

1は高杯と思われる、口縁が大きく外反して開いており、端部は水平に近い。また、口唇部はなでて面取りをしてある。胴部上半の調整は、指頭圧痕の後で刷毛目を入れ、最後になでて仕上げている。そのため、一部に刷毛目が残っている。胴部下半は全面を丁寧になでている。内面上半は横方向の刷毛目を入れた後でなでてある。そのため、一部に刷毛目が残っている。脚部は欠損しているが、杯の形態から、長脚でラッパ上に聞く脚部が付いていたと思われる。

2は壺の口縁と思われ、二重口縁のようになった口縁部が大きく外半している。外面には下から上に向かう刷毛目が見られ、内面には結節繩文が見られるが、風化のため拂りの向きはわからない。

3は壺の頸部で、一端すぼまつてから緩やかに外反している。外面はなでてあるが、工具を使ったと思われ、工具の擦痕が見られる。内面は指頭圧痕とともになでて見られる。

4は壺の頸部～胴部上半で、頸部上面の外面に下から上に向かう刷毛目があり、刷毛目の始点には原体端部の当たりが見られる。胴部上半にはLRの結節繩文が見られる。頸部の内面はなでてあり、指頭圧痕が残っている。胴部の内面には刷毛目が見られる。

5は壺の胴部の破片で、櫛描文が見られる。櫛描文は直線になる単位と蛇行する単位が交互に見られる。そして、櫛描文をつけた後に同心円の半円を描くような文様を入れ、その下には3本が単位になると思われる縦方向の短い櫛描文を入れている。

6は深鉢の口縁と思われる。口縁の両端をなでて仕上げ、口唇部をなでて面取りした後、端部の内外面に粘土を貼り付けて拵張し、拵張した部分に刻み目を入れている。また、口縁部直下に隆帯を貼り付け、ここにも刻み目を入れている。これも弥生時代中期であろう。

7は壺で、頸部外面には全面に刷毛目が見られる。頸部には縦方向の刷毛目があり、胴部には斜め方向の刷毛目が見られる。頸部の内面は横方向の刷毛目調整の後で、条間の広い原体に交換して斜め方向に刷毛目調整を行っている。胴部の内面は横方向になでてある。

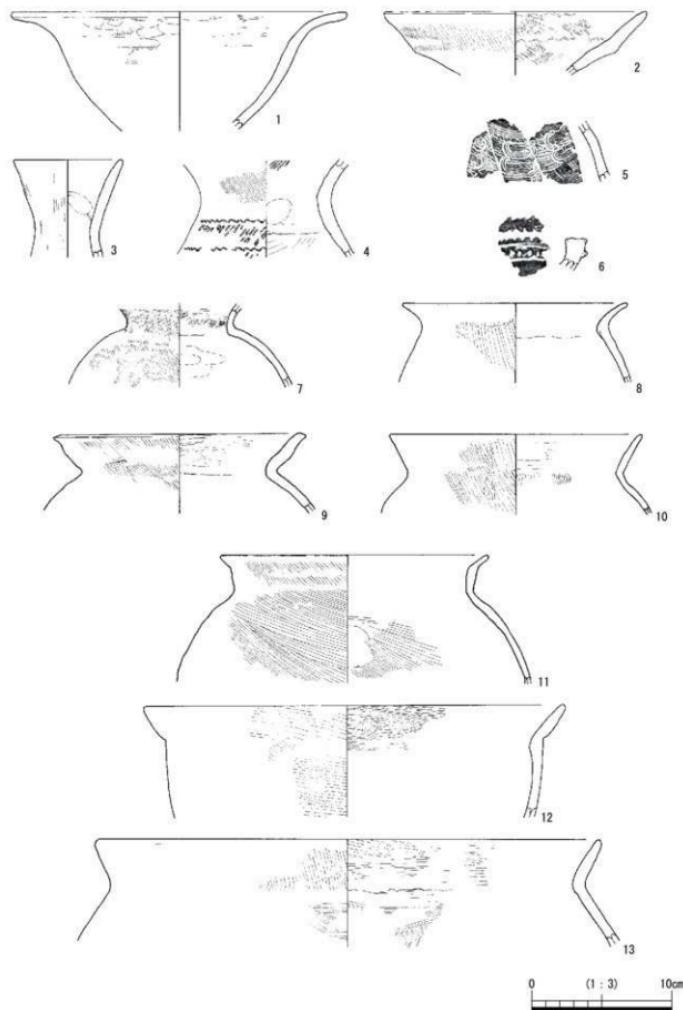
8は甕の口縁～胴部で、胴部の外縁には下から搔き上げた刷毛目が見られる。頸部にも刷毛目が入っていたと思われるが、なでによってほとんどが消えており、頸部と胴部の境界にわずかに刷毛目の原体端部の当たりが残っている。口縁部の外縁はなでてあり、端部をつまみ出して外反させている。内面は全面なでており、頸部が屈曲する部分の内面には、横方向の強いなでつけによって粘土が盛り上がった部分が見られる。

9は甕の口縁～胴部上部で、胴部から屈曲した口縁が直線的に外半している。口縁部は強いなでによつてわずかに外半しながら、やや薄くなってしまっており、端部はなでて面取りをしてある。外面には刷毛目があり、一部をなでてあるため、刷毛目が消えている。頸部の内面には横方向の刷毛目が見られ、胴部の内面はなでてある。

10は甕の口縁～胴部上半で、胴部から屈曲した口縁は外半しながら直線的に立ち上がっている。外面には縦方向の刷毛目の後で、右斜め下に向かう刷毛目が付いており、口縁内面には横方向の刷毛目、胴部内面には下から上に向かう刷毛目が見られる。

11は壺の口縁～胴部上半である。口縁部は胴部から屈曲して立ち上がり、端部をつまみあげて外半させているため、端部が薄くなっている。胴部外面は下から左斜め上に搔き上げる方向で刷毛目が入っており、口縁部は口縁端部から頸部に向かって刷毛目が入っている。頸部と胴部では刷毛目の方向が異なることから、刷毛目調整の工程が異なっていたと考えられる。内面は指による調整の後、左斜め上に向かう刷毛目が見られる。指頭圧痕が著しい部分には刷毛目の原体が当たっていない。この土器は弥生時代後期まで時期が下がる可能性がある。

第3図 発見された遺構と遺物



第25図 包含層出土遺物 1

12は甕の口縁～胴部上半で、口縁は胴部から屈曲して直線的に外反している。頭部と胴部の屈曲部には強いたるによる凹線状のくぼみがある。頭部と胴部外面には左から右に向かう刷毛目が見られる。土器を正立させてこの刷毛目をつけたとすると、左利きの動きになるが、内面の刷毛目は右から左に向かっており、右利きの動きを示している。このことから、外面の刷毛目調整の時、土器は正立させてはいなかったと思われる。この土器も弥生時代後期の可能性がある。

13は甕の口縁～胴部で、胴部から屈曲した口縁は外反して直線的に立ち上がっている。口縁部外面には下に向かう刷毛目があり、胴部には横方向の刷毛目がある。内面には右から左に向かう刷毛目が見られる。

第26図-1は甕で底部は欠損しているが、台が付いていたと思われる。胴部が横に張り出す特徴があり、口縁部は胴部から屈曲して緩やかに外反して立ち上がっている。口縁部外面には口縁直下から頭部付け根までの間に縱方向の刷毛目が見られる。胴部には右斜め下方向の刷毛目が見られる。頭部内面には右から左に向かう刷毛目が見られ、頭部直下の胴部内面には左上に指でなで上げた痕跡が明瞭に残っており、右手でなで上げたことがはつきりわかる。胴部内面には真上に搔き上げる粗い刷毛目、もしくは条痕が見られ、これは胴部外面とは明らかに原体が異なっている。条間が半円状に盛り上がる特徴があり、半円状に盛り上がった部分に微細な条線が見られることから、条間にも原体が当たっていたことになる。原体を明らかにすることは難しいが、貝殻であろうか。

時期は弥生時代後期後半まで時期が下る可能性がある。この甕は方形周溝墓の33号墓と34号墓の間にある周溝のSD475（第11図）の上面付近で出土したもので、どちらかの方形周溝墓に伴うことも考えられるが、遺物が比較的多く出土した34号墓の主要時期と思われる弥生時代中期後葉とは時期が異なるため、包含層出土として扱った。

2は台付き甕で、胴部が横に張り出す特徴がある。口縁～胴部には下向きの刷毛目が見られる。胴部外面には右下がりの刷毛目が見られる。胴部が横に張り出しているため、胴部下半の調整は、土器が正立した状態では無理で、胴部下半に見られる刷毛目は土器を倒立させて付けたと思われる。このことは脚部外面に見られる下向きの刷毛目が、脚部の端部まで及んでいることからもうかがえる。土器を正立させた状態では、胴部下半と脚部は、横に張り出した胴部の影になって調整できないからである。

内面にも刷毛目が見られ、頭部には右から左に向かう刷毛目、胴部には左上に螺旋状に搔き上げる刷毛目が見られる。この土器も1と同様、弥生時代後期後半まで時期が下る可能性がある。

この台付き甕は34号墓方部の西側斜面の上面で出土したもので、34号墓に伴う可能性は十分に考えられるが、34号墓の主要時期、弥生時代中期後葉と時期が異なることから、包含層出土として扱った。

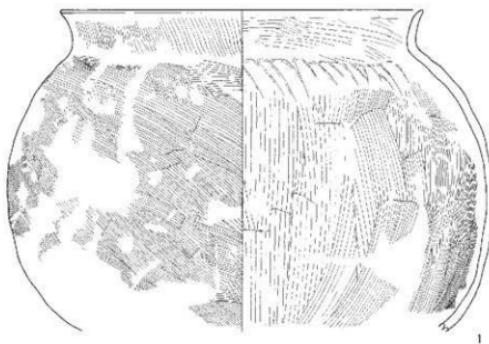
第27図-1は台付き甕の胴部下半と思われるもので、台の付け根がわずかに残っている。壺の可能性も考えたが、内面に刷毛目が入っており、壺だとすると、頭部直下の内面、通常は手を入れて刷毛目を付けることが不可能な部分に刷毛目が入っていることになるため、台付き甕と考えた方が良い。

この土器の特徴は、粘土の円盤を貼り付けた装飾が見られることで、粘土円盤には、棒状工具による螺旋状の押圧が見られる。

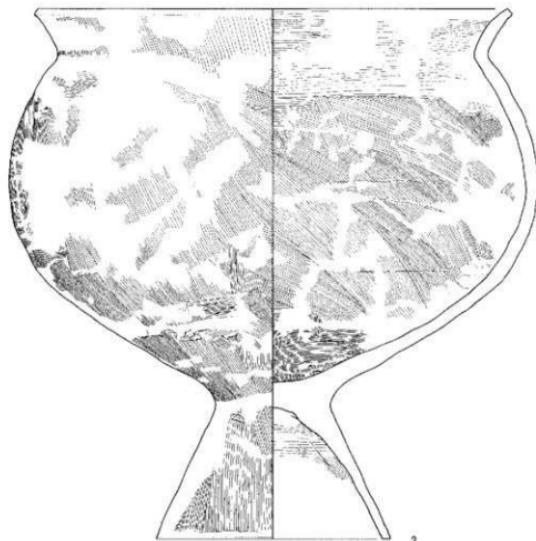
2は甕で、胴部上半と下半で接合はしないが、同一個体である。胴部下半の外側の調整は、指頭压痕の後で刷毛目が見られ、その後で工具を使ってなで仕上げている。胴部上半には刷毛目が見られる。内面は胴部上半、下半ともになでている。

3は頭部を欠損した壺で、球形の胴部である。外面には左斜め上に向かって搔き上げるような刷毛目が見られる。内面の調整は、底部は上に向かって搔き上げる刷毛目で、胴部は、指頭による調整の後、右から左に払うような刷毛目が見られる。指頭压痕で窪んだ部分には刷毛目の原体が当たっていないため、その部分だけ刷毛目が切れている。

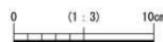
第3図 発見された遺構と遺物



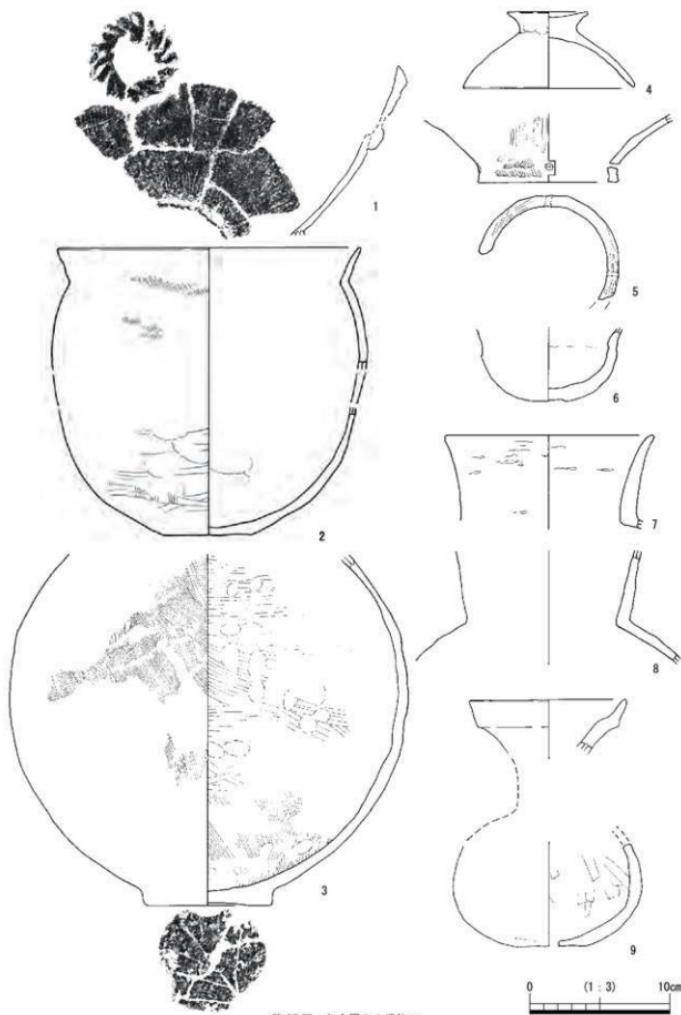
1



2



第26図 包含層出土遺物 2



第27図 包含層出土遺物3

古墳時代前期の遺物

ここで報告する遺物はすべて土師器である。

第27図-4は蓋と思われる土師器で、珍しい遺物である。つまみの部分は全面をなでてあり、上部は丁寧になでてあるため、緩やかに産んでいる。胴部は外表面ともに丁寧になでている。大きさから考えて蓋の蓋であろう。

5は二重器台の内側部分で、これも珍しい遺物である。外側器台との接続部付近に穿孔がある。外部器台との接続面には刷毛目が入っている。現代陶芸にも見られる接着させるための工作かもしれない。外表面には細かい刷毛目が見られ、内面は丁寧になでてある。きめが細かく白っぽい胎土で、他の土器とは胎土が異なる。外来土器の可能性がある。

6は丸底の広口壺で、頸部と胴部の境界に強いなでによる回線状の凹みがある。この土器の製作者はここで強く横なでをしながら胴部から粘土をつまみ出し、つまみ出した粘土を外半させて頸部を作ったと思われる。また、頸部と胴部の接続部分の内面には粘土の接合痕が残っている。

7は広口壺の頸部で、緩やかに外反しながら、口縁に向かって薄くなっている。おそらく口縁端部を外側につまみ出した結果であろう。内外面とも左から右に向って、砂粒が移動するほど強いためが見られる。なでと言うよりも削りに近い。

8は壺の頸部～胴部上半で、内外面ともになでてある。頸部はやや外反しながら直線的に立ち上がりっている。

9は壺で、胴部と口縁部は接合しないが、同一個体の可能性が高い。胴部は横に張り出した球形で、底部に焼成後の穿孔がある。外表面はなでてあり、内面には工具を使った調整痕がある。この調整は底部から上面に搔き上げるようにしてある。口縁部は二重口縁のようになっており、外半した口縁部から、さらに端部を外半させている。

第28図-1は口縁が「S」字になる壺の胴部上半で、胴部でほぼ90度の角度で屈曲した口縁が外半している。口縁端部は緩やかに外半している。外表面には右斜め上に搔き上げる刷毛目が見られ、刷毛目の終点には引きずった粘土の盛り上がりが見られる。胴部に横方向の刷毛目は見られない。内面はなでて仕上げているが、指頭圧痕が残っている。

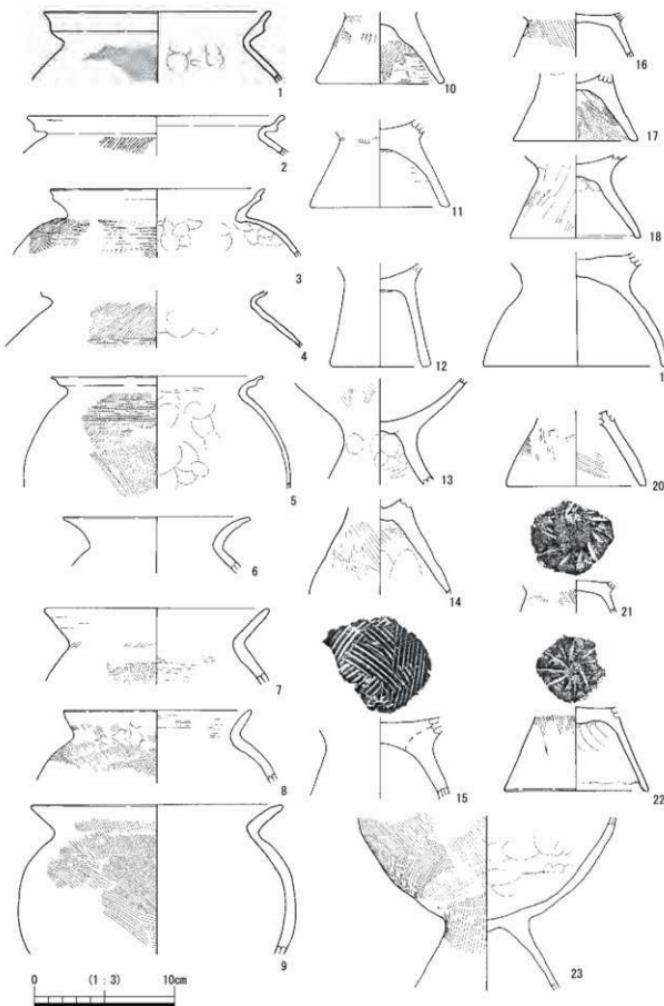
2も「S」字状の口縁を持つ壺で、胴部から強く屈曲して外反した口縁の端部から、さらに大きく外反する口縁部を作っている。口縁部の外表面は強くなでてある。胴部外表面には左斜め下に向かう刷毛目があり、口縁部と胴部の屈曲部に工具端部の当たりが見られる。この部分は非常に狭くなってしまっており、刷毛目原本の端部がここに当たっていることから、口縁部を付ける前に胴部の刷毛目調整を行ったことが考えられる。胴部内面はなでてある。

3は壺の口縁～胴部上半で、口縁は「S」字状になっているが、端部はあまり外反していない。口縁外表面はなでてあり、胴部外表面は斜め方向の刷毛目の後で、横方向の刷毛目を入れている。また、胴部には右斜め下から搔き上げた刷毛目も見られる。胴部内面には指頭圧痕が見られ、胴部が特に薄くなっているため、口縁部と胴部の屈曲部内面に段差ができる。

4は口縁部を欠損しているが、おそらく「S」字状の口縁を持つ壺と思われる。外表面には右斜め上に向かう刷毛目が見られ、その後に横方向の彫刻が見られる。内面には指頭圧痕が見られる。

5も口縁が「S」字になる壺で、胴部下半を欠損している。口縁部は強く外半し端部は水平に近くなっており、口縁端部が特に薄くなる特徴がある。胴部外表面には左斜め上に向かう刷毛目帯と右斜め上に向かう刷毛目帯が見られ、刷毛目調整の工程に違いがあったことを表している。この刷毛目調整の後で、胴部上半に横方向の刷毛目を付けている。内面には指頭圧痕が残っており、他の壺と比較しても特に胴部が薄くなっている。

第3章 調査の成果



第28図 包含層出土遺物4

6は甕もしくは壺の口縁～胴部で、胴部から屈曲した頸部はラッパ状に開いて外反している。調整は内外面ともになでてある。

7は甕の口縁～胴部上半で口縁部は直線的に外反している。口縁の内外面はなでてあり、胴部外面には下に向かう刷毛目が見られ、刷毛目の始点には工具端部の当たりが見られる。胴部の内面はなでによる擦痕が見られる。

8は甕の口縁～胴部の破片で、胴部外面には左斜め上に搔き上げる刷毛目が見られ、刷毛目の終端には刷毛目調整で引きずった粘土の盛り上がりや刷毛目原体の当たりが見られる。内面の調整は、頸部に横方向の刷毛目が見られ、胴部にはなでた痕跡が見られる。

9は甕で、胴部～頸部外面には下から左斜め上に搔き上げるような刷毛目が見られ、内面はなでてある。頸部と胴部の接続部は屈曲して頸部が大きく外反している。

10は台付き甕の脚部で、直線的に外反して、基部から端部に向かって厚さが半分以下になっている。脚部上半の外面には下に向かう刷毛目があり、下半はなでてある。脚部の内面には横方向の刷毛目があり、脚部内面の基部は刷毛目の原体が届かないため、なでてあるだけである。刷毛目がS字甕に見られるものに酷似していることから、S字甕の脚と思われる。

11は台付き甕の脚部で、直線的に外反している。風化が進んでいるが、調整は内外面ともになでてあると思われる。脚部外面の上部には、おそらく甕の胴部に統一していたと思われる刷毛目の端部が見られる。これもS字甕の脚と思われる。

12は台付き甕の脚部で、脚は直線的に外反しているが、あまり聞いていない。摩滅が著しく調整は観察が困難だが、内外面ともになでてあると思われる。

13は台付き甕の底部～脚部で、甕の底部外面には左斜め上に向かう刷毛目が見られ、内面には螺旋状に搔き上げるようななでが見られる。脚部外面は摩滅によって調整痕がはっきりしないが、なでていると思われる。脚部基部の内面には指頭圧痕が見られる。

14は台付き甕の脚で、外面には刷毛目調整の後でなでているため、刷毛目が断片的にしか残っていない。内面には刷毛目と指頭圧痕が残っている。刷毛目がS字甕に見られる刷毛目に似ていることから、S字甕の脚と思われる。

15は台付き甕の脚部で、内外面ともになでてある。また、甕の底部に当たる部分には条間の広い刷毛目による調整が見られる。

16は台付き甕の脚部で甕の底部に当たる部分はなでてある。脚部は直線的に外反しており、外面には刷毛目がある。この刷毛目がS字甕に見られるものに酷似していることから、S字甕の脚である可能性が高い。内面はなでてある。

17は台付き甕の脚部で、直線的に外反している。外面はなでてあり、内面には刷毛目というよりも貝殻条痕に近い調整痕が見られる。脚部基部の内面は工具が届かないため、なでてあるだけである。

18は台付き甕の脚部で、直線的に広がっている。胴部との接続部分には工具を使ったと思われるなどの痕跡が残っており、脚部の外面には縱方向の刷毛目が見られる。内面はなでており、胴部との接続部分には指頭圧痕が残っている。

19は台付き甕の脚部で、脚部は内湾しながら大きく開いており、薄く仕上げた印象を受ける。調整は内外面ともになでてある。

20は台付き甕の脚部で、脚は直線的に外反している。外面には下に向かう刷毛目が見られ、内面には螺旋状に搔き上げるような刷毛目が見られる。

21は台付き甕の脚部で甕の底部に当たる部分には工具を使って円を描くように調整した際の工具端部の当たりが見られる。脚部外面には刷毛目があり、内面はなでてある。

22は台付き甕の脚部で、甕の底部に当たる部分には、工具を使って調整した際の工具痕跡が残っている。脚部は直線的に外反しており、外面上半には櫛状の工具で下方向に搔いた痕跡が見られ、外面下半はなでてある。内面には、おそらく指によるなでと思われる痕跡が見られる。

23は台付き甕の脚部下半～脚部で、脚部が大きく開いている。脚部外面には下から搔き上げた刷毛目が見られ、一部の刷毛目の終端には、原体が引きずった粘土の盛り上がりが見られる。脚部の底に近い部分とその上で刷毛目の方向が異なっている上に、底部から搔き上げた刷毛目が上にある刷毛目を切っていることから、脚部下半に刷毛目を付けた時と底部付近に刷毛目を付けた時で、工程と土器の向きが異なっていたことを示している。おそらく脚部下半を調整する時は、土器を正立した状態で刷毛目を付け、底部付近を調整する時は、土器を倒立させた状態で刷毛目を付けたと思われる。脚部外面には縦方向の刷毛目が見られ、下から上に搔き上げている。刷毛目の終端は脚部と脚部の接続部分を越えて甕の底部付近まで及んでいる。甕の口縁はS字になっている可能性が高い。

第29図-1は甕で、外面はすべてなでて仕上げてある。なでは縦、横、斜め方向に付いている。内面は指痕圧痕が残っている。頭部は緩やかに外反している。

2は甕で、分厚い底から脚部が横に張り出すように広がっている。頭部は脚部から曲線を描きながら外反している。口縁端部はなでて面取りをしてある。頭部外面には左斜め上に搔き上げるように刷毛目が入っている。脚部外面と内面全面はなでてある。

3は高杯の杯の部分で、内外面ともになでてある。

4は高杯の脚部で、わずかに曲線を描きながら外反している。外面には細かい磨きがある。内面はなでてあり、工具の当たりと思われる痕跡も見られる。

5は高杯の脚部で、直線的に外反している。外面には刷毛目の後で一部をなでてある。内面はなでて仕上げてある。残存部分に穿孔が1箇所見られる。

6は高杯の脚部で、厚みのある脚が端部に向けて急激に薄くなる特徴がある。表面の摩減が著しいため、外面の調整痕ははっきりしないが、内面はなでて仕上げてある。

7は高杯の脚部で、曲線を描くように広がりながら、基部から端部に向かって急激に薄くなっている。外面には磨きがあり、内面はなでてある。また、3箇所に穿孔が見られる。

8は高杯で脚部の基部が分厚く、端部に行くに従って緩やかに広がり、厚さも薄くなっていく。また、脚部には3箇所の穿孔がある。外面は杯の部分、脚部ともになでており、脚部にはわずかに磨きが見られる。杯の内面はなでてあり、脚部の内面もなでてある。

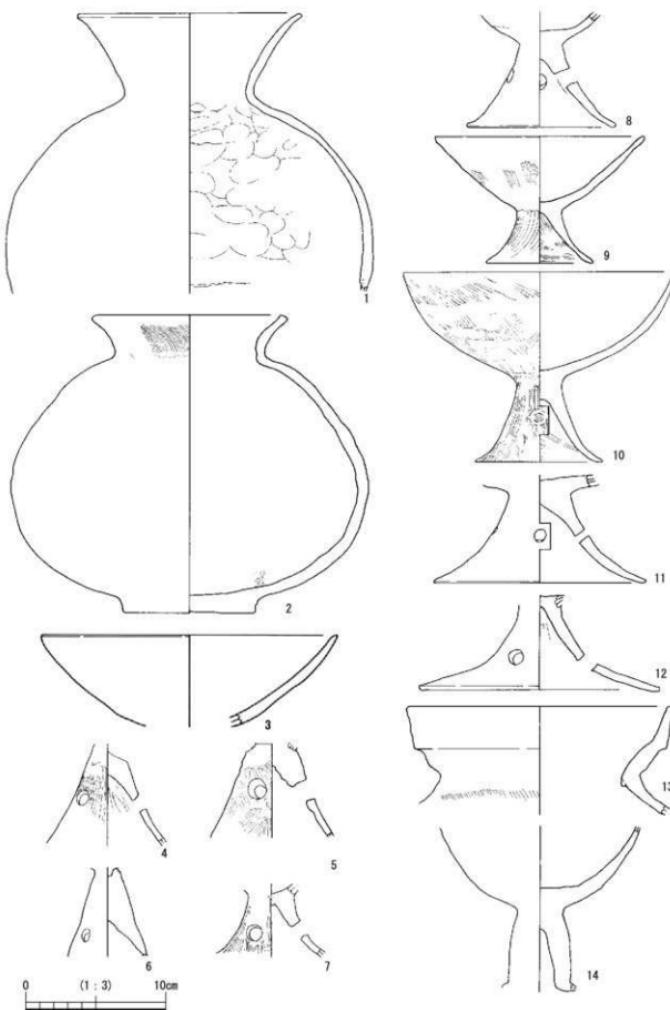
9は高杯で、杯に比べて脚が小さく印象を受ける。杯の脚部は直線的に広がっている。外面には磨きが入っており、内面はなでて仕上げてある。脚部は緩やかな曲線を描いて外反している。外面には磨きがあり、内面には斜め方向の刷毛目の後で横方向の刷毛目を入れている。脚部の基部には工具を使って調整した際の工具端部の当たりが見られる。全体的に丁寧に作った印象を受ける。

10は高杯で、杯はきれいな曲線を描いて外反している。杯の外面はなでの後で左斜め上方向に刷毛目を入れている。内面はなでてある。脚部は直線的に外反し、端部が広がっている。外面には磨きが見られ、内面には刷毛目が見られる。また、脚部には、両面から竹のような中空の工具を押し当てて回転させた痕跡が残っており、穿孔を試みたと思われる。穿孔は完結していないが全体的に丁寧に作っている印象を受ける。

11は高杯の脚で、ラッパ状に外反している。内外面ともになでて仕上げてあり、4箇所に穿孔が見られる。

12は高杯の脚部で大きく外反している。風化が進んでいるが、調整は内外面ともになでてあると思われる。また、穿孔が3箇所にある。

第3形 発見された遺構と遺物



第29図 包含層出土遺物 5

古墳時代中期の遺物

第29図-13は壺の頸部で、胸部から屈曲して外反する頸部の中ほどに強いよこなでで段を作り、その部分で頸部が屈曲して垂直に近い角度で口縁部が立ち上がっている。そして、口縁端部はなでて面取りをしてある。頸部外面はなでてあり、胸部には刷毛目が見られる。内面もなでてあり、頸部と胸部の接続部では、頸部内面をなでた際に、粘土が胸部側にはみ出して垂れ下がっているのを確認できる。

14は高杯の坏から脚にかけての部分で、棒状の脚に特徴がある。内外面ともになでて仕上げである。脚部が分厚く、端部が大きく外反する特徴がある。

第30図-1は高杯の脚部で、基部から中央にかけてわずかに膨らむように外反し、端部は屈曲して外反している。調整は内外面ともになでている。

2は高杯の脚部で、直線的に外反する脚部が、途中で屈曲して大きく外反している。内外面ともに摩滅が著しいため、調整痕の観察が難しいが、内外面ともになでていると思われる。

3は高杯の脚で、端部が直線的に外反する特徴がある。全体的に摩滅が進んでいるが、内外面ともになでて仕上げていると思われる。内面には絞りが見られる。

4は高杯の脚部で、直線的に外反する脚部が、端部で大きく広がっている。端部で広がっている部分の外面はなでており、一部に、工具端部が当たったような痕跡が残っている。脚部中央部には磨きが入っている。脚部中央部の内面には絞りが見られ、脚部端部の内面はなでている。

5は高杯で、坏は内外面ともになでてある。脚部は直線的に外反し、端部が屈曲して大きく広がっている。脚部の外面はなでてあり、脚部の内面は工具を使ってなでたようで、工具端部の当たりと思われる痕跡が見られる。

6は高杯で、坏の下半はお椀のように曲線を描きながら立ち上がっていくのに対して、上半は下半よりも薄くなり、直線的に立ち上がっていく。おそらく下半と上半で製作工程が異なっていると思われる。調整は内外面ともになでている。脚部は直線的に広がり、端部が急激に広がりながら薄くなっている。調整は内外面ともになでている。

7は高杯で、坏は直線的に広がっており、中央付近に屈曲部がある。坏の内外面はともになでてある。脚部はわずかに膨らむように外反し、端部が屈曲して大きく広がっている。脚部外面はなでており、内面は削りに近い強い調整が見られ、工具痕と思われる跡が残っている。

8は高杯で、坏の外表面は強い横なでで仕上げてあるため、器面の面凸が著しい。脚部外面もなでてある。内面は坏、脚部ともなでて仕上げてあり、脚部の内面には絞りの痕跡も残っている。脚部の端部が大きく外反する特徴がある。

時期不詳の遺物

第30図-9は小型で厚みのある高杯で、坏は緩やかな曲線を描きながら広がっている。坏の外表面は刷毛による調整の後で磨いてあり、坏の内面はなでてある。脚部は大きく外反している。脚部は内外面ともになでてあり、内面には工具痕のような後が見られる。また、穿孔も見られる。

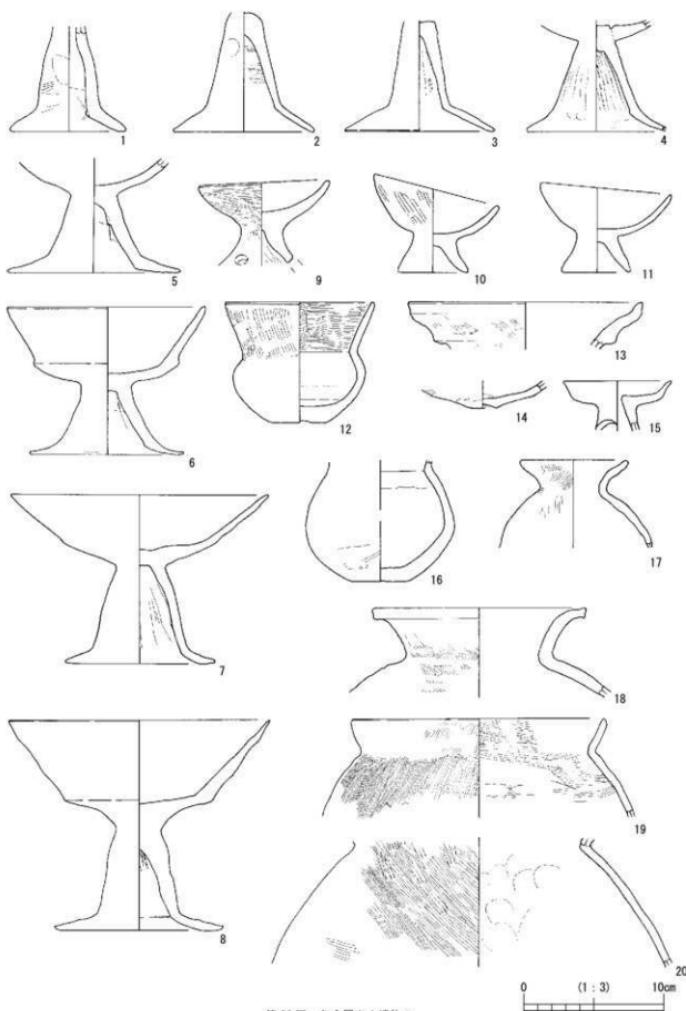
10は高杯で、坏の外表面には磨きが見られ、内面はなでてある。脚部はわずかに曲線を描きながら外反しており、内外面ともになでて仕上げてある。丁寧に仕上げてあるが、坏が歪んでいる。

11は高杯で、坏は緩やかな曲線を描きながら広がっており、内外面ともになでて仕上げてある。脚部は厚みがあり、外反している。調整は内外面ともになでている。全体的に小型の高杯である。

9～11はミニチュアの高杯で、祭祀用と考えられる。

12は広口の壺で、口縁は直線的に外反し、胸部は球形に近い。頸部外面には刷毛目の後で一部をなでており、刷毛目が消えかかっている。胸部外面はなでてある。頸部内面には右から左に向かう刷毛目があり、胸部内面はなでてある。

第3節 発見された遺構と遺物



第30図 包含層出土遺物6

13は壺の口縁で、分厚くなった口縁短部に粘土を継ぎ足して外半させ、二重口縁のようにして、さらに端部をつまみあげている。調整は外面ともになでているが、外面にはなでる前に刷毛目が入っていたようで、一部に残っている。

14は高坏の坏の部分で、脚部との接続部分で欠損しており、欠損面に脚部を接続する前に工具で調整した痕跡が見られる。坏の外面は削りとわずかな磨きが見られ、削りから磨きに変わる部分で屈曲している。内面はなでている。

15は小型の高坏で、坏の底部に穿孔がある。坏の底部は平坦で、底から口縁部がわずかに外半しながら立ち上がっている。調整は内外面ともになでてある。脚部には穿孔が見られる。

16は小型の壺で頭部を欠損している。外面は摩滅が著しく、調整痕ははっきりしない。内面はなでて仕上げである。

17は壺で、口縁は胴部から屈曲して大きく外反している。外面には刷毛目が見られる。内面は全面をなでている。大きさの割りに厚みがある印象を受ける。

18は土器器の甕で、頭部と胴部外面には刷毛目が見られる。頭部は緩やかに外反し、口縁部外面をなでている。内面もなでてある。

19は甕の口縁～胴部上半で、口縁は緩やかに外反している。口縁の外面には左斜め下方に向かう刷毛目による調整が見られ、刷毛目調整の後に横なでによって仕上げている。胴部の外面には下から上に向かう刷毛目が見られ、刷毛目の終端には引きずられた粘土の盛り上がりが残っている。内面には右から左に向かう刷毛目が見られる。

20は甕の胴部で、外面には左斜め上に搔き上げる刷毛目が見られ、その後に一部をなでて刷毛目が消えている部分がある。また、刷毛目の後に棒状の工具で刷毛目と同じ方向に搔き上げるようにした痕跡が見られる。内面には指頭圧痕が残っており、一部になでて仕上げが見られる。

第31図-1は広口の壺で、内外面ともになでて仕上げである。

2は甕の口縁～胴部で、口縁部は胴部から屈曲して短く外反して立ち上がっている。調整は内外面ともになでてある。

3は甕の底部と思われる。底部は分厚く、木葉痕が残っている。外面はなでており、内面には螺旋状に搔き上げる刷毛目が見られる。

4は甕の胴部下半～底部で、外面は摩滅が著しく調整痕がはっきりしないが、底部付近の外面に工具による削りが見られる。内面も摩滅が著しく調整痕ははっきりしないが、なでていると思われる。

5は甕の底部と思われ、かなり分厚く重量感がある。胴部は粘土のつなぎ目で欠損しているが、大きな胴部が付いていたと思われる。

6は甕の底部と思われる。底部は厚みがあることから、胴部は相当な大きさがあったと思われる。胴部外面はなでてあり、内面には螺旋状に搔き上げる刷毛目が見られる。

7は甕の胴部と思われる破片で、墨書の一部が見られる。

8は甕の胴部で、外面の調整は指頭圧痕の後に刷毛目、最後になでて仕上げるとともに、一部には棒状の工具を使った調整も見られる。

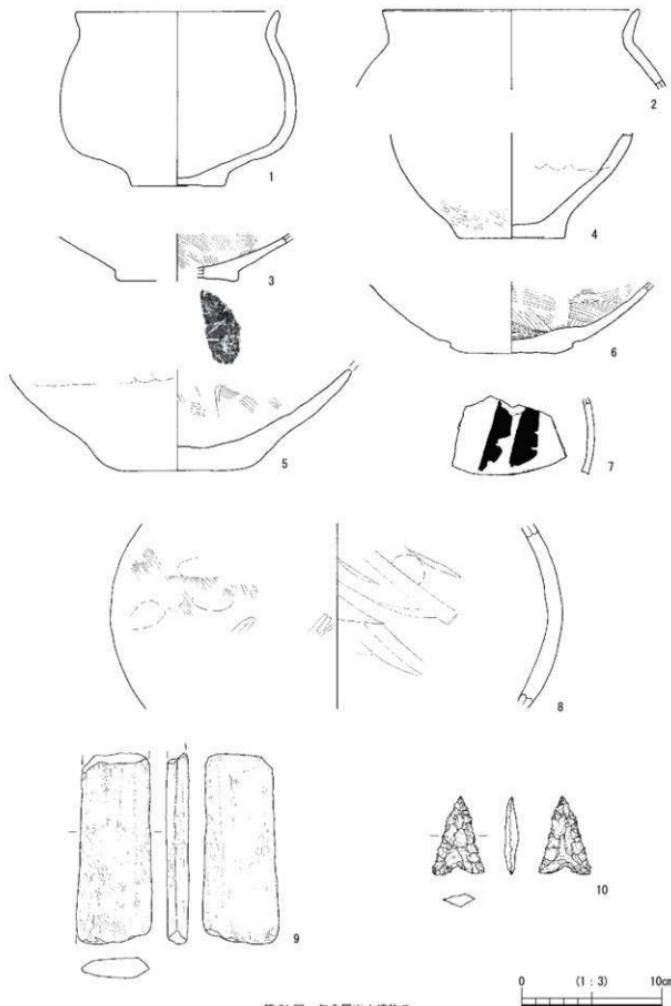
9は砂質の結晶片岩で作った磨製石斧で、基部と刃部を欠損しており、全面を磨いてある。

10はシルト岩製の石鎌で、基部は固基である。

第32図は土錐である。いずれも大型で重量感がある。

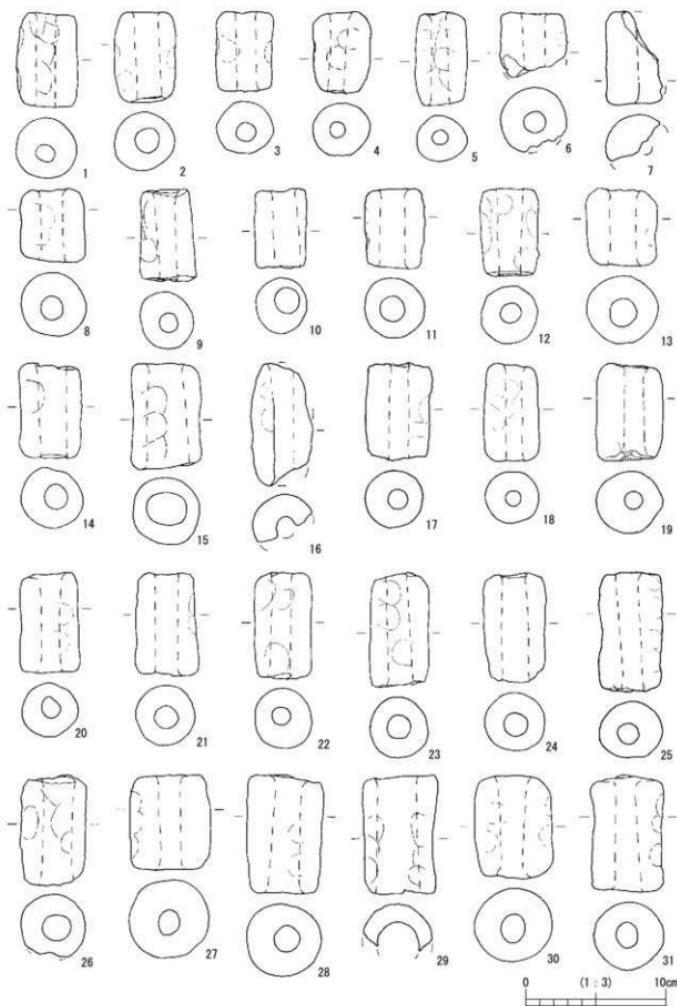
第33図は細粒の砂岩か凝灰岩を使った砥石で、全面を使っている上に、中央がくびれているため、長骨のような印象を受ける。

第33図 発見された遺構と遺物

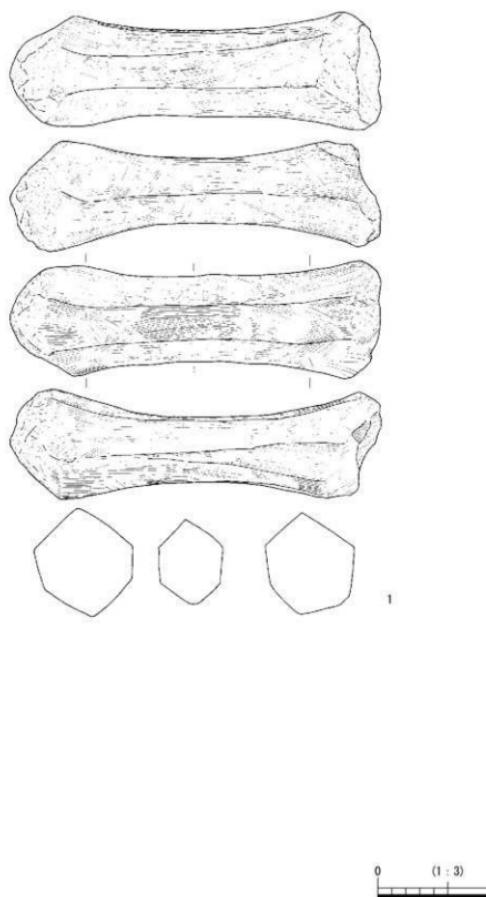


第31図 包含層出土遺物 7

第3章 調査の成果



第32図 包含層出土遺物8



第33図 包含層出土遺物 9

第4章 自然科学分析 元島遺跡出土木材の樹種

小林和貴・小川とみ・鈴木三男（東北大植物園）

静岡県磐田市の元島遺跡の弥生時代中期の土壌 SK1 から出土した木材 9 点の樹種を調べた。遺物ははらい銀 1 点、柱根 1 点、板材 2 点、加工材 5 点である。作成された木材組織プレパラートを光学顕微鏡で観察した結果、次の 4 樹種が同定された。

1 マツ属 *Pinus* (マツ科) 写真 1-1a-1c (プレパラート番号 13884)

年輪の明瞭な針葉樹材で垂直、水平の樹脂道を持つ。樹脂道を構成する分泌細胞は薄壁のため出土材では樹種道は壞れた空隙となっている。樹脂細胞はなく、放射組織は単列と水平樹脂道を持つ多列の 2 種類がある。分野壁孔は大型の窓型で 1 分野に 1 つ、放射仮道管の内壁は腐朽分解のため肥厚の程度が不明である。以上の形質からマツ科のマツ属の材であることが分かるが、仮道管内壁の肥厚状態が観察できなかったためそれ以上の詳細な識別は困難である。ただ、晩材部が幅広く、垂直樹脂道が晩材部に散在することからアカマツ、クロマツなどの複雑管束亜属の材であると考えられる。

出土材は土壌出土の板材 1 点である。

2 ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Siebold et Zucc. (ヒノキ科) 写真 2-2a-2c (プレパラート番号 13888)

年輪の目立たない針葉樹材で垂直、水平の樹脂道を欠く。早材から晩材への移行は緩やか? やや急。樹脂細胞は接線方向に連なる傾向を持ってまばらに分布。放射組織は単列、柔細胞のみからなり、分野壁孔はヒノキ型で 1 分野 1-2 個。以上の形質からヒノキ科のヒノキの材と同定した。

出土材は柱根 1 点、板材 1 点と加工材 4 点である。

3 イチイガシ *Quercus ilicifolia* Blume (ブナ科) 写真 2-3a-3c (プレパラート番号 13944)

丸~橢円形の単独道管が緩く集まって放射方向に配列する放射孔材で、大きな道管は直径 220 μm を超える。道管の穿孔は單一、一部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大きな複合放射組織がある。これらの形質からブナ科コナラ属アカガシ亜属のイチイガシの材と同定した。

イチイガシは弥生? 古墳時代の木製農具に特に多用されるが、当遺跡出土材は農具と思われる加工材 1 点である。

4 コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* (ブナ科) 写真 2-4a-4c (プレパラート番号 13946)

イチイガシと基本的な材構造は全く一致するが道管径が小さく、200 μm を超えない。道管が小さいアカガシ亜属の種類はアカガシ、シラカシ、ウラジロガシなど多数の種があり、個々の種を識別することは困難である。出土材ははらい銀 1 点である。

写真 1



1a. マツ属 13884 木口 ×30

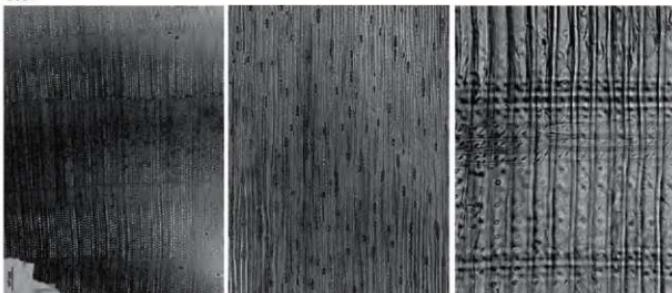


1b. 同 板目 ×60



1c. 同 痕目 ×240

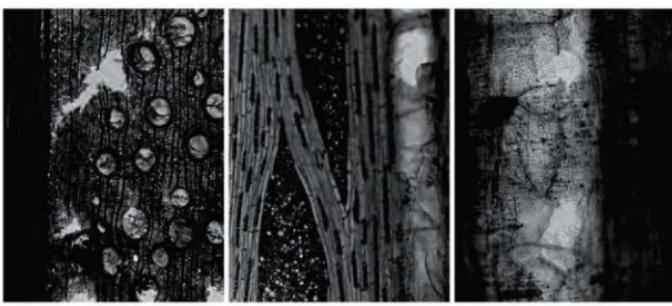
写真2



2a. ヒノキ 13988 木口 ×30

2b. 同 板目 ×60

2c. 同 桟目 ×240



3a. イチイガシ 13944 木口 ×30

3b. 同 板目 ×60

3c. 同 桅目 ×120



4a. アカガシ亜属 13946 木口 ×30

4b. 同 板目 ×60

4c. 同 桅目 ×120

第5章 まとめ

古墳時代の調査成果

今回の調査では円墳を1基検出した。主体部の残りは良くなかったが、大刀と土師器の壺が出土した。1次調査でも古墳を3基検出したことも含めて、周間に山がない平野部では、居住に適さない低地が墓域に選ばれたと考えることができる。さらに、1次調査で出土した舟形木棺からは死者を海に葬送するという海洋民族に見られる水平的世界観をうかがうことができる。海に近い低地が墓域に選ばれた背景にはこのような世界観を想定できる。

検出できた古墳は1基だけだったが、弥生時代の方形周溝墓から古墳時代前期の遺物が出土する例があった。このことからは、方形周溝墓が古墳時代になって再利用されたことが考えられ、古墳を作る他に弥生時代の墓を再利用する葬法があったと思われる。したがって、本来は古墳時代前期の埋葬跡はもっと多くあったと思われる。

包含層からは古墳時代前期～中期の土師器が出土しており、高杯が目立った。このことからは、他にも検出できなかった古墳や、後世に破壊された古墳があつたことがうかがわれる。また、S字甕が多く見られたことやミニチュア高杯が出土したことなどからは、古墳以外にも祭祀遺構があつた可能性を考えられる。

弥生時代の調査成果

今回の調査では弥生時代中期後半の方形周溝墓を検出した。これは2次調査で検出した方形周溝墓群と同じ時期である。弥生時代中期前半や後期の遺物は極めて少ないとから、弥生時代中期後半に集中して方形周溝墓が作られたことになる。

方形周溝墓の分布図を第34図に示す。この分布図から、方形周溝墓に大型の一組と小型の一組があることがわかる。そして、西側に大型の一組があり、東側に小型の一組が分布しており、それぞれが群の中で列を作っていることがわかる。規模の違いが階層の違いを表しているかどうかは、副葬品が少ないため、簡単にはわからないが、このことから、構築の順番はわからないにしても、これらの方形周溝墓は一定の計画のもとに連続して作られたと想定できる。

周溝墓の構築順としては、隣接する方形周溝墓が周溝を共有する場合があることから、新しい周溝墓を作る場合、四角のブロックを並べるようにすることは自然に想起されたと思われ、おそらくは一方向に順番に作られたのであろう。

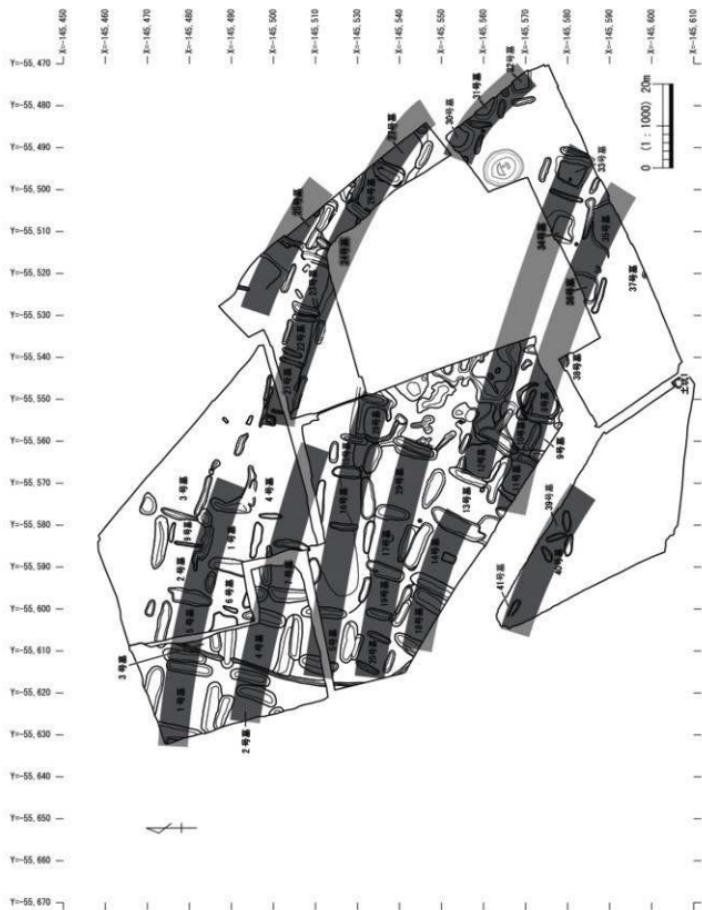
包含層からも弥生時代中期の土器が多く出土したことから、検出し切れなかった方形周溝墓がもっとあつたのかもしれない。

出土遺物はいずれも弥生時代中期後半のもので、弥生時代後期の遺物は非常に少なかった。したがって、方形周溝墓が古墳時代前期に再利用されるまでの間に空白の時期があつたことになる。

また、包含層からは土鍬が多く出土したのに対して、石鏟と言った狩猟具はほとんど出土しなかつたことから、この方形周溝墓を作った集団は、狩猟よりも漁労が重要な生業であったと想定される。

参考文献

- 1) 村上由美子「木製刈払具の検討—木器の「使い下し」に関する一考察—」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』出土木器研究会 2009年
- 2) 伊東隆夫・山田昌久編『木の考古学—出土木製品用材データベース』海青社 2012年



第34図 2次調査、3次調査検出の方形周溝墓

第1表 出土遺物觀察表

第1章

写真図版

図版 1



元島遺跡遠景（北から）



元島遺跡遠景（南から）

图版2



16区全景

図版 3



17区全景

图版 4



4号墓出土遗物

图版 5



34号墓出土遗物

图版 6



36号墓出土遗物

图版 7



土坑 1 出土遗物



4号墳全景



4号墳主体部遺物出土状況

图版 9



4号墳墳丘断面 1



4号墳墳丘断面 2



30号墓



31号墓

図版 11



32号墓



33号墓

図版 12



34号墓



36号墓

図版 13



37号墓



38号墓



39号墓、40号墓



41号墓

图版 15



1号土器棺蓋出土状况



1号土器棺身出土状况



土器棺 2 出土状況 1



土器棺 2 出土状況 2

图版 17



土器棺 1 完掘状况



土器棺 2 完掘状况



土坑 1 遺物出土状況



土坑 1 完掘状況

图版 19



包含层遗物出土状况 1



包含层遗物出土状况 2



包含層物出土状況 3



包含層物出土状況 4

图版 21



1号土器棺立面写真



2号土器棺立面写真

図版 23



包含層出土遺物集合写真 1



包含層出土遺物集合写真 2

図版 25



包含層出土遺物集合写真 3



4号墳出土遺物

图版 27



34号墓、36号墓出土遗物



土器棺、包含層出土遺物 1

图版 29



包含层出土遗物 2



包含層出土遺物 3

図版 31



土坑 1 出土払い縄



4号墳出土木製品



土坑 1 出土不明木製品

4号墳、土坑 1 出土木製品

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第36集
元島遺跡III

平成24年度二級河川太田川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年3月29日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261（代）
FAX 054-262-4266

印 刷 所 株式会社エムクリエイション
〒422-8032 静岡県静岡市駿河区有東2-4-6
TEL 054-654-0018